



学長から新入生へのメッセージ



一橋大学長
杉山武彦
Takehiko Sugiyama

大学生、一橋生に相応しい教育とは。 それを解くには、難しい時代になっています

大学に求められること、大学が応えられること

入学式では大学側を代表して式辞を述べることになっています。例年のことですが、これは悩ましい仕事です。一橋がどんな歴史をもった大学かというようなことは、歴代の学長が語り継いできたことを踏襲すればいい。しかし、それに添えて、どんなことをどう話すか。新入生に対する要望にしても、提言にしても、毎年同じというわけにはいきません。入学式が近づくと、だんだん気にかかってくる。

それだけでなく、大学および大学生に対する社会の要請は年々厳しいものになってきています。

世の中に出たらすぐに役立つ知識や技能を求める声も強くなっていますが、それに対しては大学でも授業をより実質的なものにするように努めてきました。学生も、以前にくらべれば、ある程度はそれに応えられるようになってきていると思います。

一方ここ1~2年、ルールを守るとか、人への思いやりをもつとかという、人間として社会生活を営むうえでの基本的な心構えに対する要望が高まっています。法規制を愚弄するような不祥事が頻発しているという背景もあってのことでしょう。企業のトップの発言の中にも、そういう心構えの欠如に対する危惧の声が含まれることが多くなっています。

それは、私たちにも気になっていることです。つい最近も目の当たりにしたのですが、教務課にレポートなどを届けにくる学生の多くが、本部棟の前の駐輪禁止エリアに平然と自転車を停めている。中には玄関先の車寄せの真ん前に乗り捨てている者さえいる。問題は、悪いという意識をもっているように感じられないということです。

ですから、本来の勉強と併せて、集団としてのマナーやルールについても学んでほしいと思うのですが、しかし、それが大学で教えることか、教えられることかという、ちょっと違うのではないかと思います。

以前に新聞の読者投稿欄で見かけたのですが、わが子には人様に迷惑をかけるなと教えているという親に対して、そんなつまらないことしか教えられないのか、もっと教えるべき大切なことがあるだろうという意見がありました。にわかには黒白のつけられない話だと思いますが、この記事は今でもときどき思い起こします。

1人ひとりに対する時と、全体に対する時と

これからの世の中で役に立つ知識や技能は何かということについても、いざ問われてみると、そう簡単には答えられません。

今の時代なら、国際社会における基本ツールである語学力と、情報社会における基本ツールであるITリテラシーとは必ず役に立つ、身につけておいて損はないと、標準的な1人の学生に対しては言うことができます。そうアドバイスしてまず間違いはないはずですが。

しかし、日本という国が全体としてこれからの国際社会で一定の尊敬を得ていくためには、という観点から考えると、何が役に立つかというようなことは断定的には言えなくなってしまうのです。たとえ英語ができなくても、パソコンが使えなくても、他人にはない素晴らしい知識や素晴らしい技術をもっている人はいくらでもいるわけで、そういう人たちが現に日本のみならず国際社会の大きな財産にもなっています。多様な能力をもつ多様な人間がいるということが、社会全体の活力や豊かさを生む源泉だと言っていいはずですが。

1人ひとりの学生にアドバイスする時と、全体を考えて話す時とでは話が違ってくるのです。

大学生に求められることと、一橋生に求められることは少し違うという言い方もできます。一橋ではキャプテンズ・オブ・インダストリーという言葉がいわば建学の精神になっていて、次世代のリーダーを育成するというのを、本学の同窓生組織であり支援団体でもある如水会からも強く期待されています。たしかに本学にはそれを標榜してはばからないだけの実績があり、そこに本学の最大のレーゾン・デートルがあると言ってもいい。

しかし、そこに向かってみんなが揃って一直線に突き進むというようなことは、少なくとも私には、あまり好ましいこととは思えません。本音を言えば、大学では、1人ひとりが自由で、てんでんばらばらに物事を考えて目標をもてはいいのではないかと思います。

もちろん、自由だからといって、人様に迷惑をかけてもいいということではない。人を思いやる心も欠かせない、ということになるのですが、そうすると、あたりまえのことに話が戻ってきてしまいます。何をどういう順序で強調するか、悩ましいところです。(談)

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

第4回



「あんしん、あったか、あかるく元気」の新しいスローガンのもと、
日本への観光客を1000万に増やそうという
「ビジット・ジャパンキャンペーン」の一翼を担う全日空。
大橋会長をお招きして、
真の国際人に求められる素養について伺いました。





即戦力を目指すより、自分の専門分野、
自前の哲学を磨き、個性豊かな人間であるべきだ

全日本空輸株式会社代表取締役会長

一橋大学長

大橋洋治氏 VS 杉山武彦

日本経団連の雇用委員長、経済同友会のNPO・社会起業委員長として、
ニートやフリーター、起業家を含めた若年層の労働問題に意欲的に取り組んでいる
全日本空輸会長の大橋洋治氏がゲスト。

若い人に対する期待や教育論はもちろん、CSR（企業の社会的責任）や
産学協同のあり方まで杉山学長と密度の濃い対談が行われた。



大橋洋治（おおはし・ようじ）

1940年生まれ。岡山県出身。1964年慶應義塾大学法学部卒業後、全日本空輸株式会社入社。1997年常務取締役、1999年代表取締役副社長を経て、2001年代表取締役社長、2005年代表取締役会長就任、現在に至る。（社）全日本航空事業連合会会長、（社）日本経済団体連合会理事／雇用委員長、（社）経済同友会幹事／NPO・社会起業委員長。



杉山武彦（すぎやま・たけひこ）

1944年生まれ。1970年一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。1986年より一橋大学商学部教授、2000年以降、大学院商学研究科教授（1998年から2000年まで商学部長）、2001年12月一橋大学副学長、2004年4月より一橋大学理事（兼副学長）、2004年12月より現職。研究分野は交通経済。



社会に出るまでに身に付けたい 人間としての基本の基本

杉山 平成16年に一橋大学をはじめ国立大学は法人化しました。それはとりもなおさず、教育研究を基本としながら、大学自体が自律化、個性化を進めていくということです。当然のことながら、社会が大学に対して何を求めているかに、敏感でなければなりませんし、説明責任を果たしていかなければなりません。本日は、全日本空輸（ANA）の大橋洋治会長に航空ビジネスにとどまらず、人材育成から大学への要望まで伺ってみたいと思います。まず、航空ビジネスの現状からお聞かせください。

大橋 1999年にANAは、航空会社14社からなるスターアライアンスに加盟しました。規制緩和の波は航空業界にも押し寄

せてきて、競争が激化してきたからです。1社で全世界をネットできませんから、グローバルに実力が試される時代を勝ち抜くためにはアライアンス（同盟）を組む必要があります。つまり、ANAの得意な分野を活かしながら、不足な分野はアライアンスでシェアするというのです。

一方、国内をみると、日本からの海外渡航者は1700万人にも及ぶのに対して、海外から日本へは650万人前後にすぎません。これを2010年までに1000万人にしようというのが、小泉内閣が打ち出したビジット・ジャパンキャンペーンです。我々もその一助になるよう、日本への理解を促す努力を行っています。例えば、中国や韓国との人的、物的、さらには文化的交流の強化によって、日本を知ってもらおうとしています。



杉山 航空業界の規制緩和というと、80年代の終わりにヨーロッパ調査に行ったことを思い出します。当時はまだフランスが保守的だったのが、印象的でした。航空業界が規制緩和によってグローバル化を進めるということは、文化を運ぶという使命を果たすことにもつながります。こうした独特な位置付けにありますから、学生にも人気がある業界の一つです。では、その航空業界ではどんな人材が求められているのでしょうか。

大橋 航空業界に限らず産業界では、学生に人との付き合い方やあいさつといった基本が最低限できていることを求めているのではないのでしょうか。その点で言えば、大学教育以前の家庭教育や初等教育に大きな穴があるように思われてなりません。大学は勉強するところです。人との付き合いをとっていても、高校時代とはその深みは雲泥の差になります。そこで専門を身に付けて、「自分はこういうことをやりたい」というものを持って社会に出てほしいと思っています。

付け加えれば、グローバル化の時代ですから語学力は必要になります。入社後すぐに海外派遣されることは珍しくありませんし、海外からの訪問客とのコミュニケーションはそれぞれ日常茶飯事です。

航空関係の知識については入社してから身に付けられますから、学生時代には基本だけ押さえておく程度で事細かに知る必



要はありません。むしろ、自分が学んできた専門や自分の思い、哲学を大切にしてもらいたいですね。

杉山 基本のマナーがやや不足という点では、残念ながら同感です。大学は勉強をするところだということで、そういう面の教育にはあまり留意していませんが、多少は気を配る必要があるのかもしれない。

勉強については、以前を振り返ると、大学に入ってのんびりしてしまって、はっきりした目標も持てないまま社会に出て行く学生がたくさんいました。アサヒビールの樋口廣太郎氏が『私の履歴書』（日本経済新聞社）に「大きな声で、元気が良く、いつもニコニコしていて、ちょっぴり知性があれば、大概のことはうまくいく」と言っておられましたが、その通りだと思います。でも、大学を終えて社会に出る以上は、しっかり自分の専門を持っていることが大切です。

大学としてもきちんとした人材を社会に出す責務があります。一橋大学のこの学部の出身ならば、この領域についてこのレベルの知識と力があると言えるようにするために、カリキュラムや授業に工夫をしたいと思っています。

即戦力としてより 豊かな個性と哲学に注目

杉山 先ほど航空関係のことを詳しく知らなくともいいとおっしゃいましたが、産業界からは即戦力としての学生を求められることがよくあります。そのへんは、どうお考えですか。

大橋 新入社員に即戦力を求めるのは無理があります。人材育成は長期的視点で考えるべきものです。1年目には大それたことをやろうなどと思うのではなく、一つ一つ自分の役割を果たすことが重要です。その積み重ねで、人が育つのです。学生には即戦力であることを求めません。即戦力が必要になったときには、中途採用で補充します。

学生に求めたいのは、自分なりの背景を持つことです。それは試験でいい成績を取ろうという発想ではなく、人間としての豊かな個性と哲学を持つことです。採用にあたっては、豊かな個性を見出す工夫が必要だと考えています。

杉山 一人ひとりの学生に個性が備わっていることは重要なことだと思います。一方で、いろいろなことに対応できる基



本的な型をつくることも教育の重要な点だと思います。授業中に学生に質問すると、まるで待ち構えていたみたいに「分かりません」という答えが返ってくるのが少なくありません。我々が知っていることは世の中のほんのわずかの部分であって、知らないことが多いのは学生にとって当然です。だからこそ、知っていることを総動員して知らないことについて考えるという姿勢がほしいのですが。

大橋 会社でも型にはめる部分はあります。ANAらしさを求めて試行錯誤をしましたが、「あんしん、あったか、あかるく元気」に落ち着きました。そこにANAグループらしさを追求していますが、すべてがあてはまるわけではありません。個性がありますから。

ところで、ANAにはバーチャルハリウッドといって、組織



にできないことや枠にはまらないことができる仕組みがあります。例えば、整備士が物をつくって営業してはどうかというアイデアを本人たちがバーチャルハリウッドで検討し実現に近づけたりします。すでに30以上も動き出しています。型にはめるのではなく、個性を生かしていきいき働けるようにしたいという現れの一つです。(1) 社内の人間を刺激する(2) 見方を変えれば解決法が生まれる、といった意味もあります。

総合社会科学の大学だからこそ 社会で役立てられるものがある

杉山 一橋大学は総合社会科学を研究教育する大学です。こうした領域に社会のニーズがあるのでしょうか。

大橋 これらの学問領域を発展させていくことが、ある意味では社会の中で一番役立つともいえます。会社の責務にCSRがあります。私はそのSを、次代を担う若い世代を含むステークホルダー全体を指していると思っています。航空業界にとって、地域貢献=環境、対株主=配当、対従業員=生活安定、対次代の若者=夢を与える——という責務があるのです。これが究極のテーマですね。

杉山 大学にとっても、産業界、地域、行政、学生などのステークホルダーが存在しています。いまおっしゃった「環境」については、どんな考えをなさっておられるのでしょうか。

大橋 航空機は昔からCO₂をまき散らしたり、騒音を立てた

りしていますから、その改善は社会的責務であり続けます。そこで、CO₂や騒音を減らせるような軽い機体やエンジン開発などを早くから行ってきたのです。ほかにも、ボランティアの協力を得ながら空港の近くに植林を進めています。また、2年前からは沖縄の珊瑚の育成にも取り組んでいます。

杉山 産学連携が問われる現在、社会科学の総合大学として一橋大学はどうあるべきか。どういう考えの下にどう進めていったらいいか、現在模索中です。大橋会長の立場から見て、大学一般や一橋大学の産学連携はどうあるべきだと思いますか。

大橋 例としてスイスのサンガレン大学を紹介します。毎年各国の政・財・官・学のリーダーやメディア、学生代表千数百名が集うシンポジウムです。昨年私も招かれ行ってきましたが、その時は今度大臣になられた猪口邦子さんや渡辺財務審議官、行天豊雄さんなど日本からのスピーカーは、私を含めて6名。私は、「これからアジアの力が上がってくる」と強調してきました。このシンポジウムの特徴は、企画から運営、夜のパーティまで一切を学生が取り仕切ることです。空港につくと学生がクルマで迎えに来ますし、夜のパーティでは学生が給仕までします。実はサンガレンに組織があって、多くの企業が会員になっているのです。こうしたシンポジウムを一橋大学がやったら成功すると思いますよ。

また、岡山の吉備国際大学に



は産官学の連携の契約に行ってきました。そこは元気のいい大学で、社会人としていい学生を輩出していますし、その他、東京工業大学では産学官の連携が必要なNPO関連の専攻課程を大学院に設置するそうです。

杉山 お話を伺って、元気が出てきました。その東京工業大学との間では、東京外国語大学、東京医科歯科大学とともに、四大学連合という連携の枠組みを持っています。産業界に対しても、もっと知恵を絞って、大学側から産学連携を仕掛ける必要がありますね。文系の大学の産学連携ということで、どちらかという教育面が軸になりますが、企業とも手を組んでいると新しい試みを構想したいと思っています。

大橋 それは重要なことだと思います。これまで大学とのコラボレーションは行ってきましたが、それを乗り越えて教育面で何か新しいことができるといいですね。航空関係、旅行関係などで、新たなものを大学との関係から引き出せれば素晴らしいと思います。

学生は感性が磨かれたお客さま 眠っているものに火を点けたい

杉山 国際競争力の強化は、日本の抱える大きな課題だと思います。大学が貢献する余地はあるのでしょうか。

大橋 まだ眠っているものがありますから、そこに火を点ければいいと思います。今の学生の語学力は我々のころとは雲泥の差がありますし、海外経験も豊富で国際性もあります。我々にとっては、学生は感性が磨かれたお客さまと考えています。

もう一つは女性に対する期待があります。入社試験では女性が成績上位を占めます。男性にはもっと頑張ってもらわなくてはなりません(笑)。現在社員数は1万3000名で、そのうち44.4%は女性です。管理職はまだ150名、4.5%と少ないですが、今後増えていくでしょう。

杉山 ところで、全日空にはANA総合研究所がありますが、どんな機能を果たしているのですか。

大橋 組織内にはさまざまな分野があります。そのなかで、今後育てなければいけないものがあります。しかし企画部門だけで考えても生きてきません。そこで、それらを本物に育てるためにANA総研をつくったわけです。最近では、高齢者の労働を



にらんでシニア雇用促進室をつくりました。50歳前後から自分の能力の気づき研修などを行っています。先ほど紹介したパティシャルハリウッドと通ずる、働きやすさを追求する発想ですね。

実は私は、日本経団連の雇用委員長ですし、経済同友会ではNPO・社会起業委員長も引き受けています。そのなかで、ニート・フリーターや若年者雇用の問題を検討していますが、総研ではそうしたまとめも行っています。技術的な面では、航空燃料の課題などを適当な会社とタイアップして研究したいという夢があります。

杉山 最後に一橋大学の学生に注文はございますか。

大橋 一橋大学の卒業生は、社内でも貢献しています。学生には社会に出て社会に貢献できるような哲学を持って就職してきてもらいたいですね。とりわけCSRはどの会社でも重要なテーマになっています。会社の理念は、そこに集約されていくでしょう。ANAの理念の原点は、安心・安全を守ること。それを守るのは人材です。人材は学生を採用して始まります。その入り口をきちんとみななければならないと考えています。

二代目社長の岡崎嘉平太は、「信はたて糸、愛はよこ糸、織り成せ人の世を美しく」と言っています。この精神を大切にしながら、お互いに成長していきたいですから、我々もいろいろ指導していただきたいと思っています。

杉山 本日は貴重なご意見をありがとうございました。

世界と日本と一橋

一橋大学は、世界標準の知のパワーハウスを目指して、「一橋大学国際戦略構想」を打ち出しました。これまで研究科やゼミ単位で行っていたグローバルプログラムを、大学として組織的かつ戦略的に展開していこうという構想です。国際・公共政策大学院では、インターンシップを正式に単位化、より実践的なスタイルに変革。さらに、擬似的にコンサルタントとして課題分析を行うコンサルティング・プロジェクトという国内初の試みを行っています。



理論と実践をブリッジする。実地研修プログラムを組織的に展開する ～インターンシップ&コンサルティング・プロジェクト～



国際・公共政策大学院教授
(公共法政プログラム)

山田 洋

Hiroshi Yamada



国際・公共政策大学院教授
(グローバル・ガバナンスプログラム)

中満 泉

Izumi Nakamitsu



国際・公共政策大学院助教授
(公共経済プログラム)

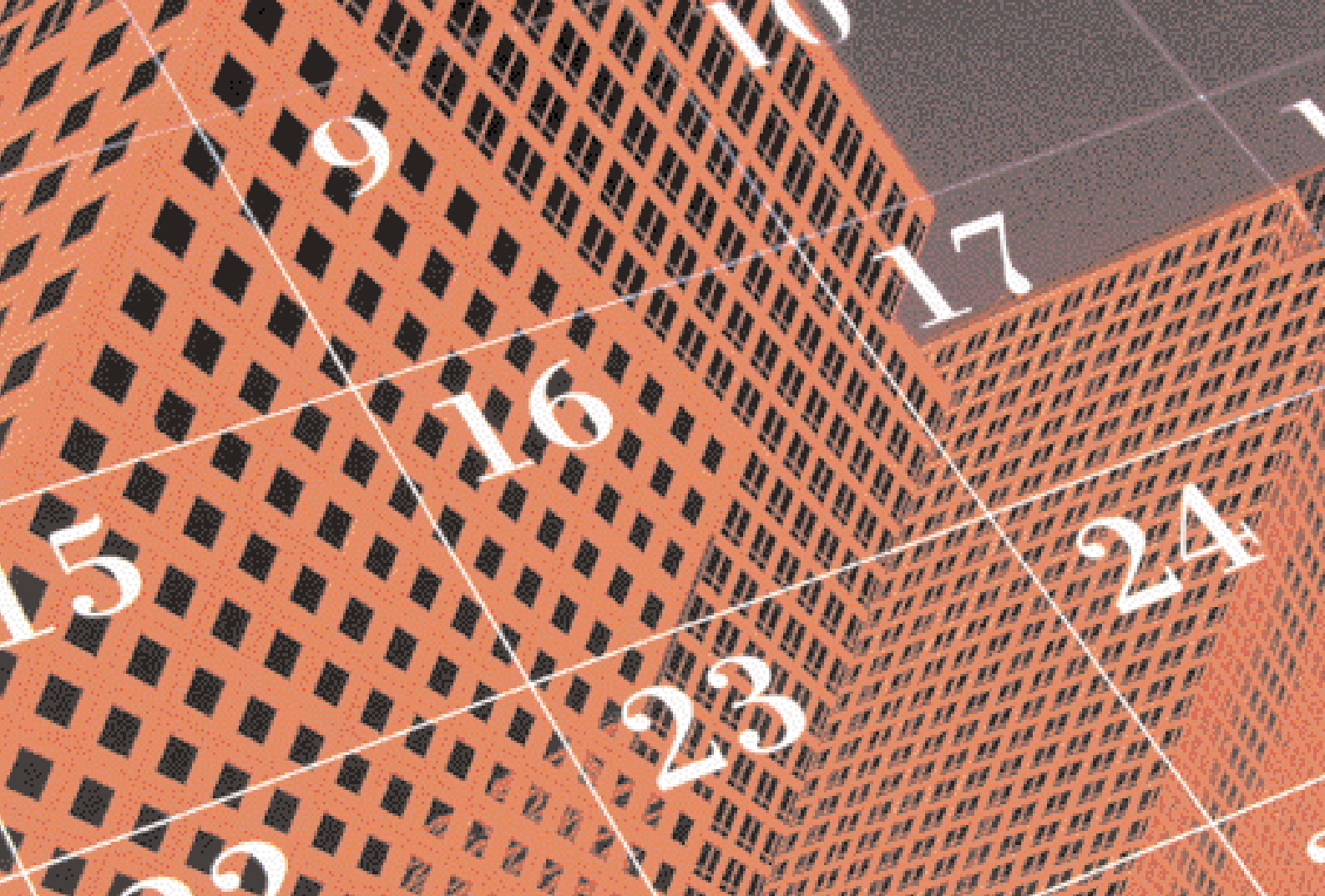
山重慎二

Shinji Yamashige

国際・公共政策大学院がインターンシップを正式に単位化したことの意味を教えてください。

山田 大学院づくりの構想の段階から、インターンシップを重視することは考えていました。それは、インターンシップが今流行っているからではありません。専門職大学院ですから、実務とのつながりが何よりも重要になるからです。大学院内で実務家による授業を行うことも重要ですが、それを深めるためには学生が学外で実務を体験することも同様に重要だからです。

中満 国連機関では、海外の大学からのインターンシップは珍しくありません。例えば、アメリカの大学では、インターンシップ生に奨学金を付けたり、受け入れを積極的に国際機関に働きかけています。ほかにもカナダなど組織的に大学院生をインターンシップ生として送り出している国が数多くあります。その点で日本はまだ弱いせいか、国際機関での日本人のインターンシップ生は少ないですね。



世界と日本と一橋

山田 企業から寄付を仰ぐなど、今後は何らかの形で学生を補助する必要があるでしょう。

コンサルティング・プロジェクトと インターンシップとは違うものですか？

山重 一種のインターンシップと考えてもいいかもしれませんが。ハーバード大学ケネディスクールなどのアメリカのポリシースクールを視察すると、学生が政策などに関するコンサルティング・レポートを作成して提出していました。それがうまく回っているのです。これはいい！と思ったのが導入を決めたキッカケです。しかし、いざ日本で行おうとすると、なかなかイメージが浮かんでできません。一橋大学なりの工夫をして、現在のスタイルになりました。具体的には、外部機関にコンサルティングの仮想的な依頼機関になってもらい、半年がかりで研究して政策に関するコンサルティング・レポートにまとめます。大学院側は研究テーマにふさわしい受け入れ機関探しやプロジェクト期間中に学生が直面する課題に対するアドバイスをを行い、学

生は月に1回程度の頻度で協力機関のコメントをもらいながら成果報告を行うわけです。最終的には約1年かけて質の高いレポートを作成することになります。この経験は社会に出てから政策分析などを行うときに役立ちますし、基本的なビジネスマナーについて協力機関からアドバイスをいただくこともできます。

正式科目としてこれらのプログラムを実施する際に クリアすべき課題はありましたか？

山田 インターンシップ・プログラムの内容以前に、交通事故やテロ、学生本人の過失などの事故対策が問題になりました。大学がカリキュラムとして提供する以上、本人や協力機関への責任をどう果たすかについて議論を重ねました。

中満 特に海外でのインターンシップの場合は神経を使います。本質論から言えば、学生を海外に出して単位を与える意味とリスクとのバランスをどう考えるかということです。最終的には、外務省の安全情報に基づいて決めました。ですから、スーダンの現地でインターンシップを行いたいという学生がいま



したが、まだ学生がリスクを冒すだけのレベルに達していないという判断から、最終的には国連機関のジュネーブ本部でスーダン関係の業務を体験してもらうことにしました。

山重 コンサルティング・プロジェクトの場合は、こうしたプログラムを実施している日本の大学がほとんどありませんから、受け入れ先機関の確保に向けて、パンフレットをつくったりして苦勞しました。担当者の方は理解を示してくれても、組織として正式に受け入れるのに手間取ることも珍しくありませんでした。最近では受け入れ機関の理解も進んで、いいレスポンスがもらいやすくなっています。

実際にカリキュラムが動き出したの 成果はいかがですか？

山重 コンサルティング・プロジェクトの受け入れ機関も学生に対する一定レベルの期待があるようです。事後評価をみると、70～80点ぐらいの評価をいただいています。前年度は5名が参加していますが、おおむね好評で、今年も受け入れたいと言っただいただいています。なかには受け入れ機関に厳しい担当者がいて、「大変だ！大変だ！」と言いながら必死に勉強している学

生もいます。いずれにしても、アカデミックな考え方とポリティカルな問題の間で悩むことは学生にとって大きな財産になるでしょう。今年度は12名が参加しますが、スムーズに組織として受け入れてもらえそうです。

中満 学生は目標を持って国際機関にインターンシップに行きます。現場では、受け入れ機関の課題やプロジェクトにかかわるわけですから、行ってお荷物になっては意味がありません。いかに理論を社会に役立てていくかという問題意識が重要ですね。

山田 政策づくりに直接かかわる仕事ですから、学生にしてみれば従来とは何もかもが違います。準備段階から自分で考え、目的に向かって行く。ベストは自分のテーマにふさわしい受け入れ先も自分で見つけて、そこで成果を挙げてくることです。

中満 海外インターンシップを目指す学生はモチベーションが高いのですが、ほんやりとした希望の段階にとどまっていたり目的が絞り込まれていないくらいがあります。また、国際機関は公募制をとっているところが多く、公募制でないところはコネがものをいうケースがほとんどです。大学側が十分なサポートを行わないと不利になってしまいます。ただし、学生には自分

◆インターンシップ・プログラム (国際・行政コース)

目的

学外での研修を通じて国際・公共政策大学院で学ぶ理論や教育内容と現実社会との関連性を考察し、大学院における学習へのフィードバックを目的とする。

プログラム構成

- 【1】事前教育：担当教員と相談のうえ自らテーマを設定して、課題研究を行い、実践研修で目的を整理する。
- 【2】実地研修：大学院で学んだ学習内容と研修先の組織・団体との取り組みとの関連性、課題などを考察する。
- 【3】事後教育：1、2を受けて自らのテーマについて、どのような解決策を提示できるか、新たな問題提起をできるか、大学院で学んできた理論・議論はどう再構築すべきか……などについて自らの見解をまとめる。

成績評価

事前教育、実地研修、事後教育、最終レポートなどを総合して決定する。研修先からの評価表が得られる場合には、これも考慮する。

◆コンサルティング・プロジェクト (公共経済コース)

目的

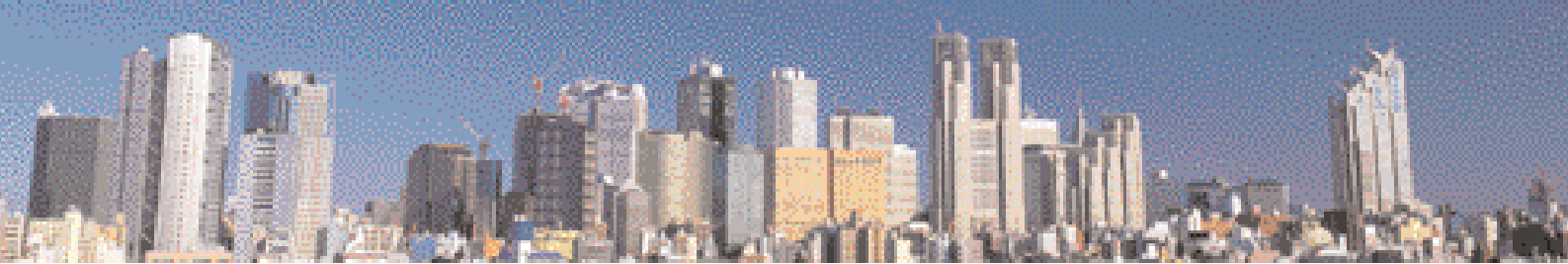
- (1) 学生が実際の政策分析や政策立案に役立つ研究が行えるようになる。
- (2) 政策決定の現場で行われる「依頼された問題に対する調査」のプロセスを実際に体験することを通じて、コミュニケーション・スキルをはじめとする実践力を身に付ける——以上2つの目標を持つ。

プログラム構成

- 学生が政策に関するコンサルティング業務を擬似的に請け負い、依頼機関との情報交換を重ねながら調査研究を行い、報告書提出までを行うプログラム。
- 【1】プロジェクト・テーマの設定：指導教員などと相談しながら研究テーマを設定。それに合った依頼機関を探して具体的な調査研究課題を設定する。
 - 【2】調査研究開始：設定された具体的な課題について、調査研究を開始する。
 - (1) 資料提供やインタビューなどに関して依頼機関に協力してもらう。
 - (2) 必要に応じて中間報告を行う。
 - (3) ワークショップやセミナーで、指導教員や同級生からコメントを得る。
 - 【3】最終報告書の完成：最終報告書を依頼機関に提出してプレゼンテーションを行い、評価してもらう。

成績評価

担当教員は最終報告や依頼機関からの評価をもとに成績評価を行う。



世界と日本と一橋

で調べて、自分で考えながら自らイニシアチブを取りながら行動を起こす姿勢が重要になります。

体験した学生は、どう変わりましたか？

中満 海外インターンを終わると、ガラッと変わります。それまで以上に主体的な態度を取るようになって、自分で積極的にアポイントメントを取って面接調査を行うようになってきました。

山重 コンサルティング・プロジェクトでは、かなり苦労して落ち込んでいた学生もいました。私たちとしては、こうしてもまれるプロセスを経ることによって、学生が大きく変わっていくことを期待している面もあります。理論と実践のギャップの中でたまたかながらレポートを書くことによって、成長することができると。実際に板挟みに悩んだ学生ほど伸びています。

このプロジェクトが社会的に認知されるようになってくれば、もっと突き放して学生が受け入れ先探しから主体的にやれるようになるでしょう。大学が組織的にプロジェクトを進めていく意味と責任は大きい、と思っています。

山田 インターンシップも、組織として動くことで社会に認知

され、制度として回っていくようになります。受け入れる風潮が社会的に広まれば、ある程度学生を突き放して陰からサポートするようになるでしょうね。

中満 ものごとは最初が肝心。最初に受け入れた学生が役に立つと、「またインターンシップに来てほしい」となります。今回は受け入れ先の評価をみると、学生ががんばったのが分かります。先方に与えられた責務を超えて、本人が関心を持った分野のインタビューを行って、好感を持たれた学生もいます。

国際機関では、インターンシップでも就職でも空席ができれば第応募しなければなりません。そこでは、何を勉強したかが問われます。通常1時間の面接を3回は実施、仮想問題にその場で回答しなければなりません。自分の頭で状況を判断して解決する能力が必要であり、そのベースが理論なのです。

山重 学生がよいコンサルティング・レポートをつくれるようになることが重要になります。それをいい伝統にする基礎づくりが現在なのです。それが一橋大学の強みの一つになるでしょう。あの大学院でこんなことを学んだからこんな仕事ができるようになった——こういう流れではなく、こういう仕事をしたいから、この大学院でこんなことを学びたいという風になればいいですね。

「人の成長を助ける開発」の一端を担っている充実感



国際・行政コース
グローバル・ガバナンスプログラム
池田杏子

インターナショナルIDEA（国際民主化選挙支援機構）の活動カテゴリーの1つに、「地方レベルでの民主主義確立」があります。他国の政治にまで踏み込んだ援助を行うことにも興味を持って、そのインドネシア支部で1カ月間インターンをすることにしました。

補助的な業務ではなく、幸運にもリサーチャーとして活動できました。具体的には、援助国の援助内容の調査を担当。各国の大使館などを訪問してインタビューをし、IDEAの情報の提供を行いました。現地で各国と協同で地方議会援助を行うわけですから、直接訪問してIDEAを認知してもらうことが重要なのです。

「まず自分でやってみる」というのが、上司の方針。プレッシャーはありましたが、IDEAが成果を挙げるための活動の一端を担っているという充実感もありました。実践と学習の繰り返しで専門性が確立するのだと思っています。「民主化支援」は面白いテーマですから、今後とも研究を深めていきたいですね。

自分の目標が見えてきたのと人的ネットワークの拡大が収穫



国際・行政コース
グローバル・ガバナンスプログラム
木須沙織

将来のキャリアとして国連での勤務を目標にしているため、インターンシップは大変魅力でした。親戚が国連で長期間勤務していたので、幼い頃より人道支援の分野に関心を持っていました。今回のインターンでは安全上の問題があったため、UNHCRジュネーブ本部のスーダン関係の部署で約1カ月間勤務しました。

担当した業務は3つあります。1つは現地へ赴任するUNHCRスタッフ向けのマニュアル作りです。スーダンでの生活・安全管理等の情報を整理しました。2つ目は、各国からの寄付金が各セクターにいくら配分されどのように活用されたのかを表にする作業です。3つ目は、ドナー向けのスーダン写真集を作るため、撮影許可の得られた貴重な写真のキャプションを日本語に翻訳する作業です。

本部はオペレーションを俯瞰して見ることができたという点で大変勉強になりました。一方で、現場に展開される日常の業務が見えないことから、少々フラストレーションや疑問も残りました。しかし確実に今後の勉強を進める上でのモチベーションは上がりました。インターンを通して国連やNGO、さらに、スーダン関係の人たちと数多くお会いできたのが私の財産です。チャンスを見つけ是非現地に行きたいと思います。



点の学問がインターンシップで線につながり、円になった



国際・行政コース
グローバル・ガバナンスプログラム
満田あゆち

5年間の銀行勤めを通じて、小さな利益の追求ではなく、地域や社会貢献などの大きな利益の追求に関心を持つようになってきました。大学院進学は、ある意味ではキャリアチェンジの手段。インターンシップは、国際機関などに勤務する際に役立つと思います。

私がインターンとして勤務したのは国際協力銀行のジャカルタ駐在員事務所。USAID（アメリカ国際開発庁）と協同で行っている「水協力」と呼ばれる、水の衛生改善プロジェクトの事務補佐を担当しました。USAIDが教育などのソフトを担当、国際協力銀行はゴミ箱の設置などのハード面を担当しています。私の業務は、プロジェクト案件に関する書類づくりや津波被害からのアチェ復興関係書類づくり、各種データ作成などです。

現地で働いたことによって、実務と理論がリンクして、具体的なイメージを伴った理解ができました。これまで学んできた点と点が、インターンシップで線につながり、円になったような感覚です。

新時代に不可欠なPFIを新しい視点で分析する



公共経済コース
公共経済プログラム
石田裕幸

大学で学んだ公共経済学をより深めたくてこの大学院を目指しました。コンサルティング・プロジェクトの存在も選択した理由の一つです。クライアント（依頼先機関）は、三井物産戦略研究所。かねて関心があったPFI（プライベート・ファイナンス・イニシアチブ）をプロジェクト・テーマに取り上げました。公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う新しい手法です。日本では、平成11年にPFI法が制定されました。

PFIには、コストに対して最高の価値を供給するというVFM（バリュー・フォー・マネー）という考え方があります。私はコストよりも、どれだけみんながハッピーになれるかという側面を重視したいと考えています。

初のクライアントとの接触は昨年11月で、現在コンサルティングの枠組みづくりの最中です。PFIでは事後の評価が何よりも重要になります。そこで、事例を選んできちんと評価してコンサルティング・レポートを作成したいと考えています。



世界標準の知のパワーハウスを目指す一橋大学国際戦略構想 ～広い地球すべてをキャンパスにするためのガイドライン～



一橋大学副学長
伊藤邦雄
Kunio Ito

研究・教育の国際化のベクトルを 「国際戦略構想」で一本化

キャンパスで勉学にいそしむ学生の半分が海外からの留学生。日本人学生の半数以上が海外留学を経験している。そこかしこで外国人の教員と学生が英語でディスカッション——。こんな光景が日常的になるのはそう遠い将来のことではありません。

かつては読み書き（算盤）をリテラシーと称していましたが、現在ではITリテラシー、グローバルリテラシーを抜きにしては、学問やビジネスを語れません。文部科学省も、大学国際戦略本部強化事業をスタートさせるなど、「知の拠点たる大学および研究機関の国際競争力の強化」を打ち出しています。その目標は、「知の世界大競争へ対応し、国内外の優秀な研究者を惹きつける国際競争力のある研究環境の実現」です。

一橋大学も大学国際戦略本部強化事業校として採択され新たに「国際戦略構想」を打ち出しました。しかし、これはあくまでキッカケにすぎません。国立大学が法人化されたということは、1つの組織体として明確な戦略を打ち出す必要があるということです。一橋大学が培ってきたさまざまなアセットを見直し、発展的に拡充しながら一橋大学の国内・国際競争力を高めていかなければなりません。こうした認識の下にすでにさまざまな試行錯誤を始めていたのです。

これからは、「一橋大学国際戦略構想」により、「世界標準の知のパワーハウス」を目指すというビジョンの下に、「ガバナンスのパワーハウス」「研究活動のパワーハウス」「教育活動のパワーハウス」の3つのパワーハウスの構築を目指します。

ビジョン

先端社会科学研究・教育の 世界的拠点をめざす

国際戦略構想のビジョンとしては、これまでの歴史と実績を踏まえて、21世紀に求められる先端社会科学研究教育を積極的に推進して、その世界的拠点として日本、アジア、さらには世界に共通する重要課題の理論的・実践的な解決を目指すことを打ち出しています。そのためには、

- (1) 新しい社会科学の探究と創造
- (2) 国内・国際社会への知的・実践的貢献
- (3) 構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成が使命となります。

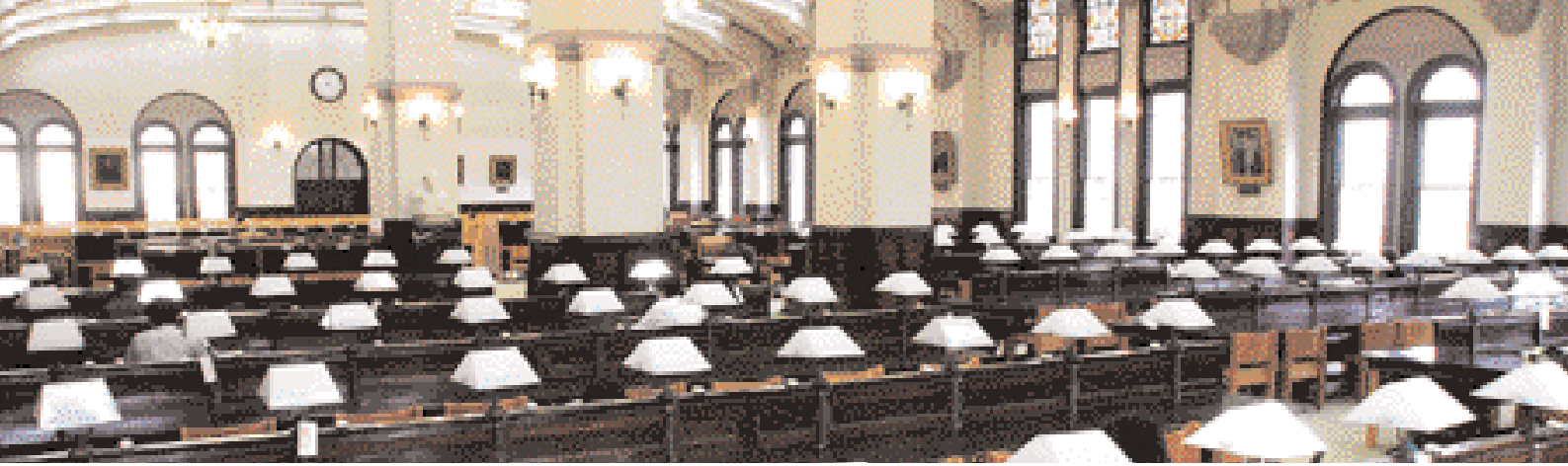
一橋大学では、国際共同研究センターを強化した新センターやEUIJ（EUインスティテュート・イン・ジャパン）東京コンソーシアム、北京事務所などを拠点とした新ネットワークをすでにスタートしています。長期的な目標を具現化するためには、一橋の知の総力を結集し、グローバルなネットワークの構築が不可欠だからです。

なお、教育・研究・社会貢献の3つの活動領域における異文化との連携や国際理解・国際協力という概念も新たに捉え直しました。従来のExchangeという捉え方からMobilityという考え方に切り替えて、より広範囲且つ高密度の知のダイナミズムを生むためのインフラ整備を目指すことにしたのです。そのうえで、大学が知のパワーハウスたるためには、知の開放性、知の流動性、知の通用性という機能を十分に発揮しなければなりません。

ガバナンスのパワーハウス

国際戦略本部を中心に 組織的にキャンパス国際化を図る

国際戦略本部を設置、学長のリーダーシップの下にアクション・プランを作成、関係部局間の調整を図りながらさまざまな施策を実行していきます。



世界と日本と一橋

例えば、帰国学生の組織化とネットワーキングも課題の1つ。一橋大学で学んで母国で活躍している帰国留学生は貴重なアセットであり、海外ネットワークの1つの柱になります。さらに、国際戦略アドバイザーや国際事業アドバイザーなどのアドバイザー制度や外部評価制度の導入も行います。

重要なのは、キャンパスの国際化の推進です。具体的には、各部局から発信される情報などの多言語化や外国人留学生や研究者が利用しやすい施設設備づくりを行い、積極的に留学生や研究者を受け入れます。

逆に海外留学を目指す学生や調査研究、国際シンポジウム等での海外出張者などを支援するためのセーフティー・アプロード体制も整備します。リスクマネジメントのインフラ整備を進めることにより、国際戦略を推進する体制をリスク回避型から、リスク対応型へと前進させて、より安全な国際プログラムを展開して、より大きな果実を得ることを目指しているのです。

研究活動のパワーハウス

積極的に研究開発の グローバル・リーチを展開

社会科学の総合大学として世界におけるリベラルな政治経済社会の発展に資することとその指導的、中核的担い手の育成に貢献すること。さらに、21世紀に求められる先端的社会科学を推進する世界的拠点となること——を目指しています。そのためには、世界第一級の研究環境とグローバルなネットワーク構築は、必須条件になります。

一橋大学では世界の47大学・研究機関との学術交流協定を結んでいます。このネットワークをさらに強固なものにしていきます。優秀な外国人研究者を育成することは、教育面はもちろん長期的には研究面でも国際戦略に寄与してくれるでしょう。

なお、研究活動のグローバル・リーチも欠かせません。研究・開発やその関連の活動成果を国際社会に向けて広く発信し、普及・還元していくことを目的として、研究・開発活動のアウトリーチを国際戦略の重要テーマの1つに位置付けています。研究・開発成果を広く内外に公開することは、客観的かつ公平な外部評価につながり、世界的な標準で厳しく検証される

こととなります。それは、教育研究活動を自己点検し、さらに質的な向上を図ることにつながります。

また、国際的なプレゼンスを高めるため、国際戦略本部にグローバル・リーチのためのタスク・フォースを設けて、教育研究情報の世界的な発信と戦略的な広報活動を展開していきます。

教育活動のパワーハウス

海外留学制度と受け入れ制度拡充で、 教育の国際通用性を高める

国際的に高く評価される研究志向型大学を目指すことが、教育における国際戦略の基本になります。教育に関する新たな国際化の手法や制度を戦略的に選択して導入することで、一橋らしさを発揮しながらグローバルに活躍できる人材育成に向けたカリキュラム開発やプログラムの再構築を行います。

まず、教育の国際通用性・共通性の向上が1つの柱。教育環境の主言語・多文化への対応、教育の国際的な通用性の向上、デュアルデグリー・プログラムの提供、海外の大学との複数・共同学位課程などの開発など、戦略的に実行していきます。

海外留学制度も再検討して、プログラムの多角化と質的拡充を図ります。1年間の交換留学制度に加えて、海外短期集中研修、中期派遣・交換留学など段階的なプログラムが基本。さらに、インターンシップやボランティア活動、多様なフィールド・ワークを含む体験学習型プログラム開発に重点を置いています。こうした多様なプログラムにより、全学生の1割程度が在学中に留学できるようにしようという計画です。

一方では、外国人留学生の受け入れプログラムを充実します。優秀な外国人留学生受け入れにつながるような短期プログラムの整備・拡充を目指しているのです。これまで大学院生中心の受け入れでしたが、学部課程の留学生受け入れを拡充することは、日本人学生にも教育的効果を高めることにつながります。

さらに、国内外の高等教育機関との連携や地域交流とコミュニティへの知の開放も積極的に行っていきます。

連載企画

世界を解く

第二回テーマ

「装う」

学ぶ、働く、遊ぶ、食す…。

人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、

そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一転させ、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第3回目のテーマは、「装う」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「装う」ということに関わる今日的諸問題を語っていただきました。

e s s a y 「ことばは思想の衣装？」

言語社会研究科教授 ● 糟谷啓介

昔から言い古された決まり文句のひとつに、「ことばは思想の衣装」というものがある。たしかにこのたとえは言い得て妙である。服装にTPOがあるように、ことばにもTPOがある。よそ行きの服装があるように、よそ行きのことばもある。わたしたちは、意識的にせよ無意識的にせよ、場面に応じて服装を着替えるように、ことばを使い分けているのである。それに加えて、「装い」をこらしたことばというものもある。どんなに無味乾燥な思想でも、ツボにはまった絶妙な言い回しで表現されると、拍手喝采的となるものだ。ところが、あまり装いすぎると、見るも無残な悪趣味におちいることもあるし、場合によっては粉飾と偽装に行きつくこともある。この間のバランスがむずかしいのは、一般の「装い」とおなじであろう。

しかし、このたとえにも限界があるようだ。衣服の場合、生身の身体がまずあって、その上に衣服をまとう。それでは、ことばにならない思想がまずあって、その次に上からことばの衣装をまとうのだろうか。どうもそうではないらしい。ことばにならない限り、もとの思想の姿もとらえどころがないままだからである。だいいち、ことばをす

べて脱ぎ去った思想は、いったいどんな姿格好をしているのだろうか。おそらく、生身の思想などという代物は、みずばらしい貧相な体つきをしているにきまっている。さもなければ、ぶよぶよと太った肥満体であろう。裸の思想や心など、そもそも見られたものではないのだ。

だからこそ、思想にはことばの「装い」が必要なのである。生身の身体を隠すためだけではない。内側に大切な何ものかが秘められているように見せかけるために必要なのである。言ってみれば、ことばの「装い」は隠しつつ顕わす。だからこそ、ことばを着せたり脱がせたりする作業に、えもいわれぬ喜びを感じる人だっているのだし、ことばとことばの間から妖しげな思想がちらりと見えたりしたら、久米の仙人ならずとも、誰だって一時的気の迷いを起こすにちがいないのである。



ダンディの系譜：Yankee Doodleの暗喩学



パーニーズ・ニューヨークのメンズ部門を通りかかったときのことである。数着のスーツ、シャツ、パンツを山のように抱えた店員に仰々しく付き添われた、とびきりオシャレなビジネスマンが早足に歩いてきた。投資銀行のヴァイスプレジデントといった雰囲気だ。私の横で、最後のアイテム、カフリンクスを選び始めた。モードのプロが絞り込んだスタイルだ、どれも素敵で甲乙付けがたい。さて、仕事のできる男性は、どうやって意思決定するのか、心の中でこっそり息を呑む。すると、突然、私に向かって聞いたのである。

「どちらが好き？」

「えっ？私？……そうねえ、こっち。deliberateって感じだから。」

「熟慮？なるほどね。ボクも賛成。これで、決まりだ。」

「今から『エスケイア』のシューティングなんだよ。」

人懐こくニコッと笑う。瞬間の意思決定だ。ちっとも、熟慮なんかしてなくたって、結果が熟慮したように見えれば結構である。

プリンストン大学の傍に植民地時代の面影を残す歴史のホテル、『ナソー・イン』のタップ・ルームに、Yankee Doodleと銘されたノーマン・ロックウェルの絵がある。ヤンキー・ドゥードルはアルプス一万尺のもと歌である。日本ではスイス民謡だと思っている人も多いが、実は、独立戦争のときにアメリカ軍＝植民地軍によって歌われた愛国歌なのである。

英仏は北米植民地の覇権をめぐる激しく利害が衝突し、一連の植民地戦争を起こしていた。フレンチ・インディアン戦争（1754年—1763年）は、その最後の戦いである。アメリカの植民地軍と共同で戦った英軍が勝利を収め、北米での覇権を掌握する。このときプロの軍人で組織された英軍に対して、植民地軍は素人の寄せ集めで全く無秩序な部隊だった。英軍が味方の植民地軍を嘲笑して歌ったのがヤンキー・ドゥードルだったのである。

羽根をさした帽子をかぶった格好の悪い男がポニーに乗って得意そうに田舎町を凱旋している。それを町の女、そして植民地兵と思われる鼓笛隊が呆れ返ってみている。イギリス兵は、立派な軍服を身に纏った紳士として描かれている。Macaroniというのは、18世紀のイギリスで流行ったクラブで、イタリアやフランス留学帰りの洒落者が集まったという。彼らは、ファッションも大陸流の羽根のついた帽子をかぶり、外国語を操り、洗練を競った。深い事情は全くわからないのに、羽根つき帽子さえかぶっていれば、十分に粋で

Macaroni dubへの出入りを許されると思っているヤンキーの野暮が嘲笑されているのである。



Yankee Doodle went to town,	まぬけなヤンキーが街へいった
Riding on a pony;	ポニーにまたがり、
Stuck a feather in his hat,	帽子には羽根をさし、
And called it macaroni.	そして、それをマカロニと呼んだ
Yankee Doodle, keep it up,	Yankee Doodle, どんどんやれ
Yankee Doodle dandy;	Yankee Doodle ダンディ
Mind the music and the step,	音楽と足元に気をつけて
And with the girls be handy!	女の子には抜かりなく

イギリスは北米で圧倒的な地位を築くことに成功したが、一方、過大な戦費支出で国内の財政危機に直面し、そのため植民地に課税し、植民地を激怒させ、1775年独立戦争が勃発する。初めての戦場となったレキシントン・コンコルドで、かつて自分達を抑圧するためにイギリス軍が歌ったヤンキー・ドゥードルを植民地軍が反対に歌い返したのだった。しかし、ワシントン將軍率いる植民地軍は相変わらずの素人の寄せ集め部隊で、フィラデルフィアまで追い詰められていた。

このとき、フランスではもう一人のヤンキーが、外交の舞台での戦いを繰り広げていた。ベンジャミン・フランクリンである。アメリカ初めての駐仏大使としてパリに赴き、独立革命への援兵と資金援助の交渉の任に就いた彼は、世界のモードの中心地パリに、当時の業界標準であったカツラをつけずにザンバラ髪であらわれ、それに毛皮の帽子をかぶり、簡単な衣服を着て、善良でウイットにとんだ田舎者の演技をして、大うけして社交界の花になる。サロンの上流婦人の人気者で、時の最先端だったナチュラリスト嗜好の体現者として、女達を痺れさせたのだという。カツラをつけない毛皮帽子は、coiffure a la franklinと呼ばれて流行になってしまう。この姿と巧みな弁舌で、ベルサイユの心を掌握したという。ヤンキー・ドゥードル転じて、本当のダンディが誕生したのだ。

フランスからの援軍が到着して、形勢が一挙に変化、1781年米仏軍がヨークタウンでイギリス軍を包囲したヨークタウンの戦いでイ



ギリス軍が降伏し、独立戦争が終わる。フランクリンは、「すべてのヤンキーの父」と呼ばれている。

ヤンキーとは誰か。

歴史を辿ると、17世紀にオランダ植民地、New Amsterdamに入植したオランダ人を指すというのが定説らしい。語源的にみると、Jan Kees, Jan Kaasであり、John Cornelius、ないしは、John Cheeseを意味すると考えられている。そして、さらに歴史をさかのぼるなら、もともとはフランドル地方の人々によるオランダ人の蔑称だということだ。Yankeeには、実に16世紀から18世紀にかけての商業・金融センターの覇権の変遷史が刻印されていることになる。

16、17世紀は、経済の国際化が著しく進んだ時代である。理由の一つは、南米経由で大量の銀が世界市場に投入され、国際取引に必要な決済通貨の供給が劇的に増大したためだ。14、15世紀地中海の経済圏が中心だったイタリアは没落、イタリアの金融業者が世界に散っていった。16世紀には中南米からの銀を押さえたスペインに大量に銀が流入、その商業・金融センターだったアントワープが栄えた。しかし、外部の貨幣である銀があまりにも大量に出回ったため、スペイン経済はインフレと輸入超過、極端な財政赤字を起こして経済破綻を招く。アントワープは反宗教改革が猛威を振るったスペインから破壊される。17世紀にはスペインから独立したオランダが覇権を握り、アムステルダムが世界一の金融都市になる。アントワープから脱出した資金、商人・職人の流入がその基礎を作ったのだった。

豊富な資金を背景に、東・西インド会社を設立したオランダは、1625年、ニューアムステルダムを建設する。しかしイギリスと激しく対立することになり英蘭戦争に敗れ、1664年にニューアムステルダムはイギリスの手に渡り、ニューヨークとなる。18世紀は、商業取引の覇権を握ったロンドンが世界経済の中心としての位置を築きつつあったが、金融センターはまだアムステルダムにあった。イギリスは、ブラジルで産出された金をロンドンに独占的に流入させるルートを確認し、19世紀に本格的な金本位制に移行する地場を固めていた。

資本主義の世界経済システムは、金銀、石油など、貴重な資源が外部から多量に流入することで構造変動を繰り返してきた。国際貿易の取引連関が変わり、取引と金融の中心地が移転するのである。しかし新しい中心に、急に取引と金融業務に従事する人的資本が形成されるわけではない。かつてロンバルディアから北に金融業者が移ったように、アントワープからアムステルダム、アムステルダムからロンドンへ、そしてロンドンからニューヨークへと人と資産が移動して新しい中心ができたのだ。

ダンディの生息地も金融の中心地と共に移動した。人と資産の移動は異文化の人々を出会わせ、文化的な軋轢、融合をもたらす。そして新興地での階級はより不安定であるゆえに、獷猛にミセビラカシの要素によって構築される。新興階級はカネに飽かして買った最新のモードをひけらかす。開き直ったりもする。ヤンキーこそがモードになったりもする。

アメリカ植民地軍をヤンキーと呼んで馬鹿にした18世紀のイギリスは、世界の中心の座を構築しつつある成り上がりの国だった。フランクリンはロンドン旅行中に書いた手紙のなかで、微に入り細に入りロンドンのファッション報告をした後で、イギリス人のことをこのように評している。English Whisk all the Mode, at Paris and the Court. (イギリス人は、パリでも、宮廷でも、すぐにモードに飛びつく。) そういうフランクリンも、耳だしカツラを試したら、20歳若返った、ギャラントだと大はしゃぎだったのだが。

21世紀の初頭、ニューヨークの金融市場では活況が続いている。その原因の一つは、世界システムへの中国の参入だと言われている。未曾有の規模での廉価な労働供給がなされた結果、全世界で賃金の相対価格が劇的に低下し、相対的に価値の上昇した不動産への投資が進み、加熱状態が続いている。不動産ファンドに入り込んだお金が増え、加えて、パイアウトファンドに流れる。その利益が大きくなればなるほど、ますます大きな資本が流入するという循環の結果、パイアウトファンドの資本規模は巨大化し、超大企業でも買収できてしまうスケールに膨れ上がった。金ばかりではなくて、野心に満ちた優秀な人材が、集まってくる。

ヤンキーが、まだ、Jan Keesだったころ、商人たちは、肖像画にとびきり知的にダンディに描かれた。世界中からカネと人を集めて資本市場を構築した人々である。有り余るカネの投資先として株式会社を考案し、バブルを發明した。商人として初めて当時のメディアである肖像画に登場し、上質のレース、毛織物、毛皮、宝石、真珠と贅を尽くしてはいるが、スペイン風のゴテゴテ重厚悪趣味からは決然と一線を画したモダンでオシャレなファッションを身に纏った。

商品取引場に顔をだし、商談をする合間に、衣装選びをする。肖像画を描いてもらう約束だからだ。男はコットンシャツで勝負だよ、もうラフの時代じゃないからね、シンプルなフラット・カラーさ。それにしても綿は高いな。毛織物を綿に変えたら大儲けできるよな。でも綿花はヨーロッパで栽培できないからな、インドから持ってこないといけないよな、チューリップの値上がり次第では、イギリスの東インド会社買収もありだな、うちの資本規模だったら十分ありだ。カフ？山ほどあるね、どれにするんだ？

「これよ、熟慮したようにみえるわ。」

「そう？じゃあさうしよう。ようやく、レンブラントのアポが取れたんだ、急がなくっちゃ。」

Norman Rockwell (1937), The Yankee Doodle

資料提供：Nassau Inn, Princeton, NJ

大学誘致のためにプリンストンにNassau Hallが建てられ、大学がこの地に移転してきたのが1756年である。それとあわせて同年、Nassau Innが設立された。その後、1777年にプリンストンは独立戦争の戦場となり、この戦いでワシントンが英軍を破り、米軍有利に形勢が逆転した。この絵は、Nassau InnのTap Roomに飾られている。Tap Roomはバブの前身で、現在はレストランとして使われているが、建築的にはイギリスのバブそのものである。

ゲーム理論からのメッセージ



【1】ゲーム理論と人間行動

2005年のノーベル経済学賞は、ゲーム理論の分野で顕著な業績をあげてきたオーマン教授（ヘブライ大学、イスラエル）とシェリング教授（メリーランド大学、米国）が受賞しました。受賞理由は、「ゲーム理論の分析を通じて対立と協力に関する人類の知の進歩に貢献した」ことです。ゲーム理論の分野にノーベル経済学賞が授与されるのは、1994年のハーサニ、ナッシュ、ゼルテンに続いて2回目です。また、94年以後ほぼ1年おきに授与されている分野はいずれもゲーム理論と深く関係し、ゲーム理論がその分析に大きく貢献しています。

ゲーム理論は、数学者のフォン・ノイマンと経済学者のモルゲンシュテルンによる共著『ゲームの理論と経済行動』（1944年）の出版によって誕生しましたが、ゲーム理論によって経済学は大きく変わりました。ひと昔前では、需要と供給、さらに市場均衡が経済学部で勉強する基本概念でしたが、現在は、ゲーム理論のナッシュ均衡が加わっています。本学でも、「ゲーム理論、II」、「応用ゲーム理論」の授業が開講されていて、毎年多くの学生諸君がゲーム理論を学んでいます。私のゼミでも、ゲーム理論の研究に熱い心（これをゲーム心と呼んでいます）をもつ学部生や院生が毎週夜遅くまで難解な数理理論に取り組んでいます。

ゲーム理論は数学を用いて経済行動を厳密に分析する理論ですが、その分析対象は経済行動に限らず広く人間行動一般にまで拡大しています。ここでは、「装う」というキーワードで表わされる人間行動をゲーム理論の立場から考えてみましょう。

【2】装う：愛のシグナル

「装う」という言葉の一般的な意味は、服装、装飾、化粧によって外観を整えるということです。贈り物をきれいにラッピングしたり、服装や化粧に多くの時間と費用をかけたりするように（とくに、最近の電車の中における日本女性の気の入れ方は大変なものですが）、「装う」という行動はわたしたちの日常生活で大きなウェートを占めています。また、ビジネスの世界でも、製品の性能ばかりでなく外観やデザインも販売実績に大きく影響します。さらに、広告活動も企業の販売戦略の重要なものになっています。

「装う」行動は人間社会ばかりでなく生物の社会でもしばしば見られます。ゴクラクチョウやクジャクの綺麗な尾羽、シカの大きな角など、たくさんの生物も人間に負けないうらい装っています。

なぜ、人間や生物は装うのでしょうか？この問いの答えを見つけるべく、経済学や生物学の研究者はこれまでにいろいろな理論を提示してきました。研究者がとくに注目するのは、「装う」行動がきわめて社会的な行為だということです。「装う」ことは、多くの場合、自分以外の人がいて意味をもつ行為です。

「装う」行動に対して、ゲーム理論が提供する有力な理論モデルがシグナリングという考えです。わたしたちは、服装や化粧で装うことによって自分の内面の何かを相手に伝えようとします。服装や化粧が相手へのシグナルの役目を果たします。雄のクジャクが綺麗な尾羽をもつのは、高い生殖能力をもつことを雌に伝えて交尾相手に選んでもらう行為と考えられています。私たち人間

装う



経済学研究科教授

岡田 章

Akira Okada

の場合も服装や化粧によって異性の注目を引こうという思惑があることは否定できないでしょう。さらに、「装う」行動は、異性関係だけでなく就職活動など社会のさまざまな場面において、自分を相手によく見ってもらう手段として大切なものです。「装う」ことは、相手をだますという一面もありますが、それ以上に大切なことは、相手が知らない自分の本当の姿を相手に伝えるという積極的な意味をもっています。でも、どのようなシグナルを出せば、相手に自分の真実を伝えることができるのでしょうか？このように考えると、「装う」という行為を通して自分と相手の間に複雑な意思決定の構造があることに気づきます。「非対称情報の経済学」のことで言いますと、自分の内面は自分しか知らない個人情報であり、「装う」ことは個人情報を相手に伝えるシグナルとして役立ちます。このことを、恋愛を例にとって考えてみましょう。

女子学生のA子さんはモーツァルトのオペラが大好きで、「フィガロの結婚」の序曲を聴くだけで胸が高まります。いつかはすてきな男性と恋愛をして幸せな結婚をしたいと願っています。男子学生のN君はA子さんが大好きで結婚したいと思っています。ある日、N君は思い切ってA子さんにデートを申し込みましたが、あっさり断られました。意気消沈したN君はゼミの教授に相談しました。教授の推論は、次のようです。「A子さんのことが好きだという君の思いはA子さんに伝わってないようです。男子学生の中には、君のようにA子さんのことを真剣に思っている良いタイプばかりでなく、遊び心でA子さんを誘惑しようとする悪いタイプもいて、用心深いA子さんは男子学生のほとんどが悪いタイプと思っているのでは。何か君の思いがA子さんに伝わる方法を考えてみてはどうですか。」

教授のアドバイスを受けたN君は、A子さんが「フィガロの結婚」が大好きなことを友人から聞いていたので、「フィガロの結婚」のチケットを2枚買ってA子さんに再びデートを申し込もうと考えました。N君にとってオペラのチケットを2枚買うことは大変な出費ですが、A子さんとデートができることはそれ以上に価値のあるものです。今度はきつとA子さんへの熱い思いは伝わるに違いないとN君は確信しました。次の日、A子さんに「フィガロの結婚」のチケット2枚を出してデートを申し込みました。A子さんは、今度はしばらく考えましたが、やはりN君の申し込みを断りました。ますます意気消沈したN君は再びゼミの教授に相談に行きました。教授の推論は、次のようです。「君が買ったオペラのチケットは、君の思いを伝えるシグナルにならなかったようです。ゲーム理論では次のように考えます。ゲームのプレイヤーには、君とA子さんだけでなく悪いタイプの男子学生も含まれます。もし君の思いがオペラのチケットによってA子さんに伝わりA子さんが君からのデートの申し込みを受け入れるとしましょう。そ

うすれば、悪いタイプの男子学生もきつと君の真似をするでしょう。つまり、どのタイプの男子学生もオペラのチケットを買ってデートを申し込むことになり、A子さんは男子学生のタイプを判別できません。せっかく君がオペラのチケットをA子さんに渡しても状況は元のままです。この状況を改善するには、誰にも真似のできないシグナルを出すことです。」

この恋愛の例にあるように、「装う」ことを通じてシグナルを出しても他の競争相手が簡単に真似をできる「装い」では相手に対する効果的な「愛のシグナル」とはなりません。恋の競争相手に真似をされないシグナルを出すことが大切です。言いかえると、自分にとって多少コストになっても競争相手にはそれ以上のコストになって真似をすることが得策にならないようなシグナルを考案することです。そうすれば、シグナルを出すことによって相手に自分のタイプが判別可能となります。このような均衡（シグナルを観察することでプレイヤーのタイプが分離できるという意味で分離均衡といいます）が実現すれば、N君からA子さんへ愛のシグナルが伝わります。自分にとってコストになるシグナルを出すことの重要性は、動物の生殖行動についても研究されていて、進化生物学の分野では「ハンディキャップ原理」と呼ばれています。

効果的なシグナルは一つだけとは限りません。N君にとっては、オペラのチケットを買ってオペラが好きなように「装う」よりも、オペラを本当に好きになるように努力することはA子さんに思いを伝える方法の一つです。モーツァルトのオペラのすばらしさを熱く語るN君の姿を見れば、A子さんもN君とカフェで一緒にお茶を飲みながらモーツァルトのオペラについて語り合いたいと思うかもしれません。

【3】 個性的なシグナルを出す

「装う」という行為は、恋人や友人、取引相手、消費者、就職活動の面接者などさまざまな相手に知って欲しい自分の本当のタイプを知らせるシグナルの役割をもっています。どうすれば、自分の思いが相手に伝わるのでしょうか？ゲーム理論からのメッセージは、競争相手に真似をされないあなたの個性あるシグナルを発信することが大切だということです。もちろん、個性あるシグナルを出すためには、相手に伝えるべき内容をもった魅力的な個性であることが必要です。在学生や卒業生の皆さんが、社会のさまざまな場面で魅力的なシグナルを発信し大いに活躍されることを応援しています。

【参考文献】本文中の説明のために用いた理論は、ゲーム理論のシグナリング・ゲームという理論です。さらに詳しいことを知りたい方は、次のテキストを参照してください。岡田章『ゲーム理論』、有斐閣、1996年

今、国連は余分な装いを捨て、 本質を見つめ直す時期を迎えている



「加盟国が望むことだけ」を 実行するという国連の立場

100日間で80~100万人が生命を落としたといわれる1994年のルワンダの虐殺。ようやく希望が見えはじめているものの、91年以来、公式の国名すらない泥沼の内戦がつづいたソマリア等々、第二次世界大戦から半世紀以上のときが過ぎた現在でも、世界には悲惨な状況にある国や地域が少なからず存在しています。こうした現実に対して、国際機関は何をなし得たのか、あるいは何がなし得なかったのか、そしてそれは何故なのか。国際連合（国連）はいまその本質的な役割が厳しく問われ、痛みを伴うパラダイムシフトのときを迎えているのです。

ご存じのように国連は、第二次世界大戦終結後の1945年10月に発足した国際機関です。国連とその指針である国連憲章について国連広報センターは次のように述べています（<http://www.unic.or.jp/know/form.htm>）。

「国連は世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって発足したユニークな機関です。各国とその国民を代表するのはあくまでも政府です。国連はどの国の政府も国民も代表するものではありません。国連はいわば主権国家の組合のようなもので、加盟国が望むことだけを実行できるのです。国連はむしろ、独立した国々が集まって、個別の国の問題や、全体的な問題を話し合う場であるといえるでしょう」

ここで注目すべきなのは、国連は「加盟国が望むことだけを実行する」ということ。国連は国家を代表する政府の集合体であり、

それぞれの国家の内部の事項には立ち入らないということです。世界の国々がすべて国家を運営するシステムがキチンと機能し、自国民を守る国民に認められた政府が存在する「国」であれば、この国内事項に不干渉という原則は、正しいことだといえます。でも、問題は国家システムが崩壊し、国民を守る政府が消失してしまった場合、あるいは多くの人命に関わるような内戦が勃発したときです。不干渉が原則だからと、現実から目を背け、見て見ぬふりを装うのは、果して正しいことなのでしょうか。

虐殺という現実から目を背けた、 ルワンダ内紛

難民高等弁務官事務所（UNHCR）をはじめとする国連機関の現場にいるスタッフたちは、つねにこの問題を突きつけられてきました。「世界の平和と安全をリードする」国連安全保障理事会のメンバーが安全な場に身を置き、見て見ぬふりを装うことによって、多くの人命が犠牲になる事態に直面してきたからです。その典型的な例がルワンダでした。1962年までベルギーの植民地だったルワンダでは、反植民地運動の組織化を抑制するために少数派のツチ族を優遇し、多数派のフツ族を抑制する差別化政策が意識的に行われ、その対立を煽ってきました。独立後も民族対立はつづき、1990年頃から反政府ゲリラによる攻勢が激化してきました。政府軍と反政府ゲリラの停戦合意が結ばれた直後の1994年4月、突然、フツ族の過激派による組織的な虐殺が開始されたのです。当時、ルワンダには停戦監視のために国連の平和維持軍（PKO）が展開していました。ところ



が、ベルギー兵が民族紛争に巻き込まれて虐殺されるという事態が発生。国連安保理はアメリカの主張に沿うかたちでルワンダからの撤退を決定したのです。国連は大虐殺が起こるといった情報を得ていながら、「ルワンダで起きている事態は国連が介入すべき国際的なジェノサイド防止義務にあたるかどうか」といった議論に終始し、現実から目を背けたのでした。この事実、国連の歴史に記された汚点だといえます。

隠れ蓑としての人道支援

同様の見て見ぬふりは、何度も繰り返されてきました。1992年～94年のボスニア内戦では、国連加盟国は「何かをしなればいけない」という合意に達したものの事態を收拾する政治的な解決策が見つからず、難民・避難民・その他市民の救済のための人道的援助が活動の中心にすえられました。もちろん人道援助は国連がなすべきことの一つですが、ボスニアで行われたのは人道的な隠れ蓑。本当にやるべきことをやれなかったために何かをしているふりを装う、いわば国際社会のアリバイづくりだったと言わざるをえません。

こうした国連の現実に対して、変えよう・変えなければいけないという声は、現場から組織へと徐々に広がっていきました。国連のような大きな組織を変革することは、簡単なことでも、一朝一夕にできることでもありません。それでも、国連は徐々に変化の兆候を見せはじめています。国内事項不干渉の原則は存在するものの、国家主権には国民の保護の義務を伴うとの考えが生まれ、「民主的な政治体制がない・もしくは弱体である」「多民族・多宗

教が混在している」といった内戦を捉える視点が模索され、国連の真の役割を問う議論が起りはじめています。国家の安全保障だけでなく、人間の安全保障も重要であり、国家が国民を虐殺などから保護する意志または能力がない場合には国際社会が「保護する責務」を負うという認識が加盟国で共有されつつあり、国連はようやく、パラダイムシフトの時代を迎えたのです。

見て見ぬふりを装うことが、社会を歪める

今後国連が、どこまで真の役割を突き詰めていられるか、まだ定かではありません。アメリカの単独主義の傾向もあり、混沌とした状況はまだつづいていくことでしょう。そして一方では、いまでも内戦がつづいている国や地域があり、2000万人を超える難民が存在しています。こうした時代だからこそ、いま必要なのは、国際社会に関わる一人ひとりがそれぞれの役割と真剣に向き合うこと、そして、世界がめざすべき方向を指し示せるようなリーダー、冷戦の真っ只中で、国連の役割をどう確立すべきか、真摯に考え、行動した第二代国連事務総長のハマーショルド氏のような深く思索することのできるリーダーが求められていると思います。

見て見ぬふりを装うことが、人間の生や社会を歪めてしまう事例は国連に限らず、世界の至るところに存在しているはずです。そのなかで人として生きるために、私たち一人ひとりに求められているのは、余分な装いを捨てること。ありのままの姿や本質をしっかりと見つめ、自分にできる何かを行うために、知識を獲得することではないでしょうか。

「装い」に問われる歴史、まなざし



「四人組」の根拠地となり、 反「装い」の街へと変貌した上海

昨年の年末を久しぶりで上海で過ごした。上海図書館通いが始まると、閉館後の散歩の道すがら、目抜き通りをはずれて点在する小じかれた店に立ち寄った。その一帯はかつてのフランス租界区、今もかつての「摩登」な古い家並みを残す。もちろん、再開発の大波は押し寄せてきているものの、1990年代から急速に開発された、マンハッタンかともがうがごとき高層建築が林立する浦東とは、ひと味もふた味も違う。足をのばせば、ハイ・センスな上海的ローカル性を売りにして、今やちょっとした観光スポットとなったアートの路地、泰康路田子坊へのコースもある。現代アートの大小ギャラリーや、工房を兼ねた各種の楽しいカルチャー・ショップが連なる。

上海がおしゃれな、そしてグルメの街なのは、商業的大都市というばかりでなく、もちろんアヘン戦争後の開港地で、もと列強の租界を有したというコロニアルな近代史と切り離せない。横浜と同じところがある所以でもある。

だが一方で、上海は文化大革命期、「四人組」の根拠地となった街でもある。それは、装いの上海を反「装い」の発信地に大転回させた。それ以前、上海モダンガールたちは抗日戦さなかの「孤島」期でも国内の戦闘を横目に、華麗でタイトなチャイナドレスを身にまとい、ジャズをはじめ「上海摩登」文化を謳歌した。さらに、日本占領期の40年代前半においてすら、戦争に総動員された「欲しがりません」の日本愛国婦人のひつめ髪にもんべ姿とは対照的に、電気パーマをはやらせた。かつて華夷を分けたのは言語と「衣冠」、道学先生たちを嘆かせたことだろうが、彼女たちの示した意地を感じるというものだ。

それが文革期には、「装い」も花を飾るのも蟋蟀や犬猫のペットを飼うのもブルジョア的、反革命的だとされた。質素な人民服に化粧

つ気のない顔。家庭の団樂の「私」を捨てて集団生活の「公」にかえ、女の子たちは男になりたいと願い、「天の半分を支える」女性労働者は「労働戦線」に文字通り男性と同じく動員された。

人民服は、反「ブルジョア的」ファッションとして 受け入れた全共闘世代

もちろん、文革は女性の「装い」を抑圧したところか、のちにその闘争の被害者の多さからも示されたように、深い傷痕を人びとに残しはした。だが、もう一面で、ベトナム反戦とかかわる国際的な学生運動と響き合っていたことも否定できない。中国との国交もなく、情報が限られたなかで学生期を迎えた私の世代が見ていたのは、ゴダールの「東風」や「中国女」だった。「帝国主義とすべての反動派は張り子の虎」、「破私立公」、「人民に奉仕する」、「造反有理」などと、さすが「文の国」の革命家は「ことばの政治」に巧みで、ゴダールたちをさえ魅了した。ノーメイク・人民服姿は、シンプルで力強い「赤と黒」の毛沢東プロパガンダ・ポスター同様、資本主義社会にあっては新鮮ですらあった。

反「ブルジョア的」ファッションとして、私たちは人民服にかわる、なぜかアメリカの労働着、ジーンズとTシャツをいたく愛し、それでデモにあけくれるような学生時代を通したのだった。だから、大学卒業・就職後に院生として学生生活に戻り、文革後の開放・改革路線とともに始まった政府交換留学で81-83年に北京大学に学んだ時も、中国の学生同様、人民服を着ることにまさして抵抗はなかった。

「装い」をテーマに中国史を語るとき 避けては通れない纏足文化

さて、「装う」ことは、ジンメルらの論考をもちだすまでもなく、人間の文化の基本的な営みのひとつである。人間が単なる裸を木の



葉一枚で覆って以来、「装い」が心身と外界、社会とのインターフェイスとなり、内外の関係性の構築に大きくかかわっているからには、ハイ・カルチャーからは見下され、辺縁化されようと、なおざりにはできない。私も参加している「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」プロジェクトの仲間、足立真理子さん(お茶の水女子大教授)は日本の化粧品会社史研究を進めるなかで、日本の経済学者——不思議なことにほとんどが男性、そういえば一橋大もそうだが——が、「装い」の文化の要素を単純に物質的「消費」としてしかみない点を鋭く批判する。その指摘は、では、歴史学においても「装い」という文化をまっとうに捉えようとしてきたのか、という疑問をも喚起する。

政治・経済史はいうまでもなく、社会・文化史でもどれほどこの「装い」に正面から向き合ってきたかは心もとないところ。歴史が「男性史」でしかなかったという批判を浴びたことにもかかわることであろう。中国史においても、たしかに「服飾史」はあるのだが、それはむしろモノの歴史で、人間の文化生活のそれとはいえない。

中国史上の「装い」としては、纏足の文化を無視することはできない。宋には始まっていた纏足は、明代、初めは芸能者のそれをまねた漢族の上流階級・富裕層に、やがて、初めこそ禁令を出した満州族の清王朝期、17、18世紀からは農民の娘たちにも広く流行した。多様とはいえ、何しろ、代表的なのは、数歳から足を縛って、甲の骨を盛り上げて指を折り曲げるようにして、理想的には足サイズを10センチほどにまで変形する纏足。ピアスやタトゥーなどがそうであるように、身体変工こそはファッションにつきものとはいっても、その長期にわたるであろう苦痛を考えると、酷い、グロテスクだと今の人なら思う。実は欧米近代に流行したコルセットほどには不健康ではなかったかもしれないのだが、運動を阻害するし、不衛生で身体へのダメージも大きく、確かに現代の生活向きではない。

この纏足を「身体文化」とみなしてアメリカのドロシー・コウさん(バーナード大教授)が研究してきた。一部を除いて女性が長く排除されていた「文字」による史料が少ない分、モノ、つまり靴や道具・家具類、そして絵画なども含めて史料とし、書き言葉の限界性をも問う。儒教的ジェンダー規範の枠内ながら、単に父権の犠牲者としてのみならず、纏足の痛みにたえ、美しい刺繍靴—アートを作り、交換するといった風に、着実に女性たちが自らの文化空間を広げていった歴史を見事にほりおこしている。はなから異常視することなく、「彼女たちの靴に足を入れながら」、女性たちの声を丹念に聞いて説明しようとする態度があってこそ、なしえたことといえる。多くの美しい写真を見るだけでも興味ひかれる彼女の著書が、最近、素晴らしい訳者を得て翻訳出版されたことを喜びたい(『纏足の靴:小さな足の文化史』小野和子・啓子共訳、平凡社、2005)。

纏足に対して当時の男性文人たちは競って美称を与え、世間も大脚の女性は「ブス」、田舎者、下層の肉体労働従事者(それはし

ばほぼ少数民族)と嘲った。小脚が美の基準となり、大脚は結婚に不利となり、生活が保障される「よりよい縁談」のために、親たちはこぞで泣き叫ぶ幼い娘の足を縛り、娘たちもそれを美とするようになったのであろう。

洋纏足(ハイヒール)と 外に顔を出したイラク女性が語ること

それが19世紀後半あたりから、宣教師や医師による異教徒の野蛮で不健康な習俗とする見方も出て、社会改革を唱える中国男性たちからも、「国恥」とみなされだす。そこで奇形・苦痛・残酷・野蛮・落伍といったイメージが形成される。禁止が明文化された中華民国になると、男女双方に根強い愛着があったゆえに、やがて地方によっては「纏足狩り」も強行される。都会から「天足」(纏足しないままの足)がはやりだして、今度は小脚が野暮となる。骨の大幅な変形にいたった女性は回復を望まず、無理に纏足をほどくと、歩行もより困難となり、美しい靴もつけられない。靴の女性文化空間も破壊され、かくして纏足で苦しみ、纏足をほどくことで肉体的苦しみばかりか、さらに「落伍の足」として自己卑下の精神的な苦しみをもなめた、清末から民国にかけての女性たち。社会進化論が中国にも流行し、「中国の遅れ」の象徴として、また優生学的見地からも責められた彼女たちの受難、「国民の母」としての認知を得るにいたる試練については、拙著で記したところだ(『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』岩波書店、2004)。新中国建国後でさえ、かの毛沢東も鄧小平も、纏足女性を嫌い「中国の歩み」の比喩に用いたのだった。

清末から小脚の妓女の絵はがきが、おもに中国を訪問した欧米人向きに作成された。それ自体は植民地主義、オリエンタリズムの典型でもあるが、上海ファッションを着こなす小脚妓女たちは、多国籍資本の広告ポスターを飾ることになる1920年代末からの上海モダンガールたち—「洋纏足」ともよばれたハイヒールをはいいた—の原型といっている。贅沢な「装い」を謳歌したモガたちの実体はむしろ幻のように危うく、男性によって描かれ、広告によって大量複製されたアイコンでしかなかったかもしれない。だが、そのすそ野には、当時、男工を数で上まわるほど、一家の稼ぎ手となった女工たちがいた。終日、働きつめの彼女たちも、わずかな金を工面し、モガを夢見てささやかな流行の「装い」を求めた。

前近代の纏足女性からモダンガール、文革期の女性にいたるまで、彼女たちのそれぞれの「装い」へのまなざしを考察してみることは、現在の私たちの「他者」の「装い」に対するまなざしに検討を迫りはしないか。たとえば、他国による武力「解放」で、ことさらに顔の覆いを開かれ、学校や選挙に行くイラク女性たち。彼女たちを、英米等のメディアが「イラク戦の正当性の象徴」に仕立てるのを、喜んでみられるだろうか。いま私たちは問われている。

アオザイとベトナム人



「長い上着」の意を持つアオザイは、 そもそも一部の貴人の装いだった

最近、生春巻きやパッチャンの陶器など、ベトナムのさまざまな文化が日本でも身近に感じられるようになった。民族衣装のアオザイも、テレビ番組でよく紹介されているし、観光ツアーで出かけるとオーダーメイドで作ってくれる店に案内されるのが定番で、体にぴったりフィットするシルクの感触に親しみをおぼえた女性の方も多いただろう。日本で注文することもできるようだ。

アオザイ (áo dài) とは、ベトナム語で「長い上着」という意味であり、前後の身頃が一枚の長い布で膝下まで覆われるところからその名がある。今の日本では和服のことを単に「着物」というが、ベトナム語でわざわざ「長い」と断っているのは、ほかにもさまざまな衣装があるからである。つまりアオザイは、ベトナムの唯一の伝統的な民族衣装というわけではない。

ベトナムではじめてアオザイが流行するようになったのは17世紀から18世紀にかけてのことである。それ以前のベトナムでは、えりがなく身頃ももっと短い上着を着て、さらに男性はゆるいズボンを、女性は巻きスカートをはくのが普段着であった。アオザイを「長い上着」と呼ぶのは、それまでの短い上着と区別するためにそう名付けたからである。今でも古典劇を見ると、民衆が着ているのはたいてい短い上着の方で、アオザイは身分の高い貴人の着る装いである。

清朝のチーパオ (旗袍) を受け入れた、 「文明の象徴」としての装い

一目見てわかるように、アオザイは中国のチーパオ (旗袍) とよく似ている。今のチーパオは、ときにすらりとした足を見せて男性の目を引くために長ズボンをはかないことがあるが、それは一般的な装いではない。もともとすそに深い切れ目が入っているのは、清朝を建て明にかわって中国を支配した漠北の満州族が男女とも馬に乗っていたためであり、当然下には長ズボンをはいていたのである。ベトナム女性がアオザイを着るときも、下半身にはズボン (クオンquầnという) をはき、上半身にはアオザイの下に短い内衣を着る。えりが高く立って首を覆っているところも、アオザイとチーパオはよく似ている。

このように互いに離れた地域の民族衣装が似ているのは偶然ではない。アオザイがあらわれた頃、ベトナムでは北部のハノイに本拠を置くチン (鄭) 氏と、これに対抗して中部のフエに本拠を置いたグエン (阮) 氏の二つの勢力が対立していた。チン氏は、ベトナム発祥の地である北部のハノイにあって、国境を接する中国に朝貢し、ベトナムの正統な王権をもつレー (黎) 朝の王を手元に擁している点でグエン氏より優位に立っていた。グエン氏は自らの短い、中国から離れた周縁的な歴史をカバーするために、自らの都をハノイより「文明的」に、正しく飾り立てようとした。アオザイは当時のベトナムにとって唯一の文明であった「中華」の服飾として清朝からもたらされ、まずグエン氏統治下の中部と南部で普及した。



「文明の象徴」から 「自分たちの民族衣装」へ

19世紀前半、グエン氏の末裔グエンフクアイン（阮福映）によって現在のベトナムが統一され、グエン（阮）朝が成立すると、その都はフエに置かれ、ハノイは破壊されて王朝文化を失った。今ベトナムで「伝統的な宮廷文化」と観念されているもろもろの文物や風俗習慣は、すべてフエに伝えられているものである。そのグエン朝はベトナムの王朝の中で、中国にもっとも忠実にならなかった官制を整え、「中華」文明の理想へと近づくことにもっとも熱心であったことが指摘されている。アオザイは広く民衆の着るべき正装として、このとき北部を含む全土に広められた。この時期のアオザイは、自分たちの「民族衣装」というより、むしろ「モダン」な、今のわれわれにとっての「よそ行きのスーツ」のような感覚でとらえられていたのではないと思われる。

では、アオザイに「ベトナムを代表する民族衣装」というイメージが与えられたのはいつ頃だろうか。もちろん植民者として外から「ベトナム」を見いだしたフランスの視線があげられることは言うまでもない。しかしより決定的な出来事は、フランス統治下の1930年代に興ったアオザイの革新運動に求められる。

ベトナムにとって、1930年代という時期は、フランス本国に人民戦線内閣が生まれ、内には共産主義者や急進的な民族主義者があらわれて植民地体制にゆらぎが見られる一方、植民地統治下に生まれ、それを前提として育った若い世代が新しい都市文化を花開かせた時期でもあった。王朝文化や古い因習を否定し、フランスから流入する新しい思潮や文化に触発されながら、自ら「ベトナム人」としてよって立つ足場を確保するために、文学や演劇を中心に、文化面でのさまざまな模索と創造がくりひろげられた。アオザイの新しいデザインが提唱されたといわれる雑誌『フォンホア』も、植民地体制に寄生する封建的な特権階層に強い批判を向けた啓蒙主義的な文学グループ「自力文団」が中心になって刊行されたものであった。

「装い」に対する解釈は、一様ではない

この時期から、焦点がもっぱら女性用のアオザイに当てられていくようになることに注意したい。都市部では、男性が「よそ行き」に着るアオザイは日本の「紋付き袴」と同様に早くか

らすたれ、洋風のスーツにとってかわられたため、現在ではお祭りなど特別な時にしか着られず、そのデザインにも変化やバリエーションが少ない。これに対し、女性用の装いはすぐに洋装に移行することはなく、むしろ「モダンな女性像」の象徴としてアオザイがモード化された。現在一番ポピュラーな、体の線にぴったりフィットしたデザインが考案されたのもこの時代のことである。その後も「アオザイを着るベトナム女性」というベトナム人の自己イメージが消えることはなかった。「男性から見られる身体」として表象された近代女性像と文化ナショナリズムとの結びつきをそこに見いだすのは容易なことであろう。

もちろん、和服ほどではないにせよ、体の前後に大きな布がゆれるアオザイの構造は、日常生活にとって決して機能的とは言えない。植民地時代が終わると、長い戦争のあいだ窮乏に耐えなければならなかった北ベトナムでも、物質的には繁栄をほこった南ベトナムの都市部でも、女性の社会的な活動の範囲が広がるにつれて、次第に洋服の普及が進んでいった。国土の統一後も、経済的な苦境が続いた90年代初頭までは、モードとしてのアオザイを追求する余裕は生まれなかった。改革開放路線が軌道に乗り、街にアオザイの仕立屋があふれるようになった現在でも、アオザイと今のベトナム女性との関係は、外から見えるほどしっくりいっているわけではない。たとえば、少なくとも中学・高校が女子用制服に白いアオザイを採用しているため、「白いアオザイ」には日本の「セーラー服」にあたるような「聖的な」価値付けが与えられているのだが、「きゅうくつで動きにくい」「高価すぎる」と洋装への変更を訴える生徒があらわれて新聞紙上での論争に発展したのはつい昨年のことである。

こうしてみると、「チャイナドレスと元は同じではないか」というだけではあまりに単純すぎるにしても、ベトナムの「民族衣装」としてのアオザイに相応の「脱神話化」が必要なことは確かである。とりわけアオザイが、もともとは日常から離れた、「外とつながるための文明的な正装」として受け入れられたにもかかわらず、その後「自らの民族的なアイデンティティを体現する正装」として解釈しなおされたという逆説はとても興味深い。「装う」という行為は、人間にとってもっとも高度な精神の営みのひとつであろうが、人間が何のために何を「装う」のかは、時代によっても場所によっても決して一様ではないということを、スリムなベトナム女性の体をひらりと舞うように飾る美しいアオザイの生地が教えてくれているように、私には思われてならない。

もう1つ上のステージで活躍してほしいから、ICSでは身だしなみについても教えています



服装はノンバーバル・コミュニケーションの1つです

ICSには「Dress for Success」という授業があります。ビジネスの場での身だしなみについて具体的にレクチャーするという授業で、「Business Skills for Success」というプログラムの中の1つのセッションとして年に1回だけ行っているのですが、けっこう評判がいいです。

こう言うと、そんなことまで大学院のMBAコースで教えないといけないのかと眉を顰める方もおられるんじゃないかと思いますが、私たちは、服の選び方や着こなし方も、レジューム・ライティングやジョブ・インタビューなどと同様、とても大切なビジネス・スキルの1つだと考えているのです。というのも、服装はノンバーバルな、つまり非言語のコミュニケーションの1つだからです。

相手にどんな印象を与えるかは、コミュニケーションの成果にも大きくかわるのですが、印象というのは、ほんの数秒で形成されてしまう。しかも、そういう印象の多くは、話された言葉の内容（コンテンツ）だけでなく、その人の服装やしぐさ、顔の表情、さらには声のトーンや大きさなどによって影響

されるといいます。そうである以上、言葉以外で伝える技能、ノンバーバルなコミュニケーション・スキルもないがしろにはできません。

ICSの学生たちには国際的な舞台上で活躍することが期待されているから

もちろん、だからといって、単に、おしゃれになれと言っているわけではありません。服装もコミュニケーション・ツールの1つとして捉えましょうというのが、この授業のメインのメッセージです。

たとえば、HPのカーリー・フィオリーナ元会長をGoogleでイメージ検索してみてください。彼女が何を着ているかを見るだけで、彼女がその場面で何を言わんとしているかがなんとなく分かります。新製品を発表する時には赤いスポーティなジャケットを着ている。これは、躍動する企業というイメージを伝える服装です。一方、NECとの業務提携を発表する時には濃いグレーのスーツ姿でした。これは、紺とグレーが中心の日本のビジネスマンの服装に合わせることで、自分一人が抜きんで目立とうとしているのではない、NECと自分たちは仲間だ、対等のパートナーだということを伝えようとしているのですね。

装う



場面に合わせて服装を変えるということは、私たちがそれなりにしていることです。ただ、その時、どんな服装がどんな意味をもっているか、相手にどんな印象を与えるかという基本的なセオリーをきちんと踏まえているかどうか問題なのです。たとえば同じグレーでも、色が濃いほどフォーマルな印象ですよ。

ICSの学生たちには、国際的な舞台上で活躍することが期待されています。ですから、この授業では、洋服の伝統のある国の人から見て不自然じゃない身だしなみをするために、基礎的な約束ごとから教えます。たとえば靴は必ず磨いておく、シャツやパンツにはアイロンを当てておく、ネクタイの結び目にはエクボをつくる、ボタンは貝や角などの天然素材のほうがいい、ポケットチーフがネクタイと同じ柄なのは野暮に見える、というようなことです。

相手にとって心地よい服装が、 自分にとっても心地よい服装になる

ICSの教員の中には、かつてアメリカのコンサルティング会社で働いていた者もいて、彼に言わせると、服装で自分を表現しようと考えたことはないのだそうです。当時のコンサルティング業界では、彼だけじゃなく、だれもがプレザーにグレーのパンツか、シンプルなダーク・スーツかを着ていて、一時は靴まで同じものをもっていったそうです。目立つ服装をしていると、あいつはなんなんだと言われてしまうようなところがあったそうです。これは、クライアントの注意を、話す内容にフォーカスしてもらうためのコミュニケーション戦略なのだと思いますが、もっと基本的なことと言えば、業界によって、インサイダーとして認められる服装というものがあるのです。銀行業界とIT業界とでは身だしなみについての考え方が異なる。そういうことを踏まえて服装を選ぶということも、コミュニケーション・スキルの1つだと言っていいでしょう。

また、服装は、自分自身の気分に影響するということがあります。ICSのプレゼンテーション・スキルの授業には即興劇の稽古というセッションもあって、そこでは同じせりふをいろんな表情で言ってみるというようなことをするのですが、そうすると、つくった表情に自分の内面がだんだんに影響されてくることがわかります。服装にも同じような効果があって、何を

着るかによって、気分が高まったり緩んだりするのです。

そういう意味では、それを着ていると心地よく自分を表現できるということが、服装を選ぶ場合の1つのポイントになると思うのですが、しかし、その心地よさの中には、相手にとっての心地よさという要素も入ってくるのです。相手が自分の服装を見て変だなと思っていたら、それは敏感に感じられることです。自分にとってもけっして心地いいことではない。ですからやっぱり、相手を考え、場面を考えて服装を選ぶということが身だしなみの基本であり、コミュニケーションの基本でもあるのだと思います。

講師は、服装の専門家ではない ICSの教員たちが務めています

こういう授業が始まったきっかけは、すごく単純なことでした。何年前か前に、これからジョブ・インタビューに出かけるという学生の一人が、前スリットの入ったスカートをはいていたのです。それまでは、そんなことまでわざわざ教えなきゃいけないとは思っていませんでしたが、これはまずいねと衆議一決して、早速、次年度からカリキュラムに組み入れることにしたのです。

とはいえ、ICSの教員に服装の専門家はいませんから、講師は八方手をつくして探しました。しかし、英語で講義ができて、しかもビジネスの現場にも通じているという条件を満たす方となるとなかなか見つけられなくて、とりあえず現在は、研究科長の竹内弘高教授とアベ・シャーマン教授を中心とする何人かの教員がそれぞれに、これだけはということを話すというスタイルをとっています。ICSの教員は、いろんな場面でいろんな企業の方と接する機会が多いため、身だしなみについても普段からそれなりに気を配っています。ですから、押さえなければいけない最低限のことはカバーできているのではないかと思います。

年に1回だけの授業ですが、それでも、こういう授業があるのとならば学生の服装に向ける目はまるで違ってきます。この授業があると、しばらくの間、ほかの授業を担当する教員たちまで、学生たちからファッション・チェックをされているように緊張するのだそうです(笑)。学生の注意はすぐに、講義のコンテンツの方に移っていくのですけれどね。(談)

同一性を装う必要はありません。 差異があるからこそ他者に貢献できるのです



反米行動の裏側には アメリカへの憧憬もある

1997年、私はほとんど日本語がわからないまま、一橋大学に留学してきました。私が研究していた産業政策は、日本から始まったといってもいいでしょう。そこで、指導教官が日本で勉強するといいと推薦してくれたのです。実際に、韓国の大学院で産業政策を学んでいた90年代は、先行研究が進んでいた日本の研究書が最高の参考資料でした。小宮 隆太郎、奥野正寛、鈴木興太郎先生編の英語版『日本の産業政策』を読んで、凄い研究をしていると刺激を受けたものです。

80年代、韓国では、かつて60年代に日本でもそうであったように学生運動が花盛り。反米感情が強かった時期です。英語の本を持って歩くのも難しいような雰囲気満載であふれていました。当然、国際的な関心よりも国内問題に関心が集中、世界への知的関心の窓が閉ざされていた状況でした。研究も内向きで、国際比較にまで意識が広がっていなかったのです。

装うというのとは多少違いますが、韓国の対米観には2つの流れがありました。一つは学生を中心とした反米感情です。しかし、

その裏にはアメリカを夢の国と見る憧れがあったのです。そのせめぎ合いで、85年～89年にはアメリカ留学が減っています。88年のソウルオリンピックが転換期となって、またアメリカ留学が増加し始めています。同時に海外旅行の自由化も始まり、海外に開かれてきたのです。海外文化との比較も容易になってきました。

つまり、私は韓国の国際化の流れで言えば、ちょうど空白の世代にあたります。世界の動きがよく分からないまま、初めての外国として日本にやってきたのです。東京は、建物も人もソウルと全く変わりません。外国という感じがしませんでした。しかし、私のチューターになってくれた6歳年下の大学院生は、フランスやイギリスなどさまざまな国での生活を体験していました。その国際経験の豊富さに圧倒されました。

本質を知るには 横軸、縦軸から観察せよ

自分のことだけを見ていたのでは、比較ができませんから、自分のスタンスさえ明確にはなりません。その点で、当時の日本人は広く世界に目を向ける余裕があったように思われます。ところが、最近では余裕がなくなったのか、日本も閉鎖的な



ってきたように思われてなりません。靖国神社の問題もそうですが、何をどう対処したらいいのかが、分からなくなってきたように見えます。若者はゲームやベットに逃げ込み、人と人とのつながりが薄くなっています。

失われた10年の罨にはまって内向きになり、これまでの良さを否定しつつあります。日本は世界に向けてオープンにすることで成功を収めてきました。その成功を90年代の失敗で、時計を巻き戻すのはよくないことだと思います。

国際比較でいうと、北朝鮮を鏡にすると韓国の変化が明白に表れてきます。朴大統領時代は軍事政権でしたから、北朝鮮を見ても同じような政権に見えました。ところが、現在の北朝鮮を見ると独裁政権として違和感を覚えます。つまり、国際比較でも現在という横軸だけではなく、歴史という縦軸を見ることも重要なのです。

人間関係のスピルオーバーは 違いの容認から始まる

韓国は大学の数は少ないですが、大学自体の規模が大きくて2万人以上の学生がいます。そのせいか同期意識がほとんどありません。また、クラブ活動も複数掛け持ちするなど、それほど熱心ではありません。ゼミがないせいか、教員と学生との関係もさほど密接ではありません。その点で、一橋大学のゼミ文化はいいですね。

講義というスタイルは教育の方法論として生き残ってきたわけですから、一つの優れた方法です。しかし、教員と学生の個人関係による指導では、さらに深いところまで研究を深められます。また、定期的に接触することは、自分の成長にも有効です。ただ、問題があるとするれば、それが教員の質次第だということでしょう。研究に熱心で人格的にも優れた教員ばかりでしたら、最高の教育法といえます。もっとも私は、来日してからほぼ9年間、ほぼ一橋一本でしたから、一橋の教育をもって、日本の大学教育を語るのは無理がありますが。

私は、横浜市立大学と日本大学でも非常勤講師をしています

から、日本人の中でも考え方や態度がバラバラなことは理解しています。しかし、おしなべて日本人は自分を表現するのが下手というか、表に出さない傾向にあります。大阪人は、自分を出しているように見えますが、本当の自分をさらけ出しているようには見えません。実は韓国人も自分を押しさえる傾向がありますから、これは東洋的な謙譲さを美德とする習慣からなのかもしれません。しかし若いときには、こうした態度はよくありません。とりわけ大学や大学院で学ぶ際には、自分を積極的に出すようにすべきです。どんなときでも自分なりの表現をできる人の方が、成長できると思います。自分をはっきり出すことによって、新たな文化をつくり出すことができるからです。韓国の民主化運動は、大学生の自己表現の一つといえるでしょう。

なお、日本人は、人の間違いを理解しようとはしますが、自分と違う意見については批判する傾向があります。違うことを許さない姿勢は、あまりよくありません。私の研究テーマは、「R&D Spillover (スピルオーバー)」です。スピルオーバーとは、自分の努力だけでなく他者の影響も受けることを意味します。つまり、みんなが一色で同じ方向を向いては、スピルオーバーは起こりません。みんなが同じことをしたがるのは、日本や韓国の特徴の一つです。しかし、違うことをしたり、違う視点でものを見たりすることは、他の人に貢献することでもあるのです。

私も、教員や先輩、同僚、学生からいろいろなものをもらっています。いろいろな分野があって、いろいろな視点で研究するからこそ、お互いに刺激し合うことができるのです。もちろん、自分がしっかり勉強していなければ、自分の足りないことが見えませんから、他の人から何かをもらうことができません。自分も成長し、他人にも貢献するために必要なことは自分を磨き、勇気を持って、自分を表現することだと思います。

最後となりますが、実は私は2006年の4月から他大学に移ることが決まっています。実質的な意味で、初めて一橋大以外の世界を経験することになります。日本で外から見た一橋はどのような装いに見えるのか？ 広く日本の大学生を見た時、どのように感じるのか？ これからの研究者生活が楽しくなりそうです。(談)

「男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラム策定」

GenEP

がスタートしました



推進メンバーは、代表に関啓子教授（前列左）、
企画推進委員長に木本喜美子教授（後列中）、
同副委員長に貴堂嘉之助教授（後列右）、
同委員に中野知律教授（後列左）・
佐藤文香助教授（前列右）ら社会学研究科が中心で携わる。

2005年6月、

「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラム策定」プロジェクト(GenEP)がスタートしました。このプロジェクトは、これからの日本がめざす男女共同参画社会に向けて全学的な教育プログラムを考え、実践していくことを目的としています。

プロジェクトが生まれた背景は何か、どのような活動を行い、何をめざすのか、企画推進委員長の木本喜美子教授にうかがいました。

教員自らが立ち上げたプロジェクト

このプロジェクトの大きな特徴は、社会学研究科の教員たちが自ら発案して立ち上げたムーブメントだということです。世界的な大きな流れの中で、日本がめざす「男女共同参画社会」の実現に向けて取り組んでいくことは、「市民の学としての社会科学の総合大学」である一橋大学にとってきわめて重要な責務の1つといえます。もちろん、将来、社会のさまざまな場面で活躍していく学生にとって、男女共同参画に対する高い意識と理解が必要不可欠な素養となることは言うまでもありません。社会学研究科では、こうした考えのもと、90年代初めから男女共同参画やジェンダーに関する講義が、さらに90年代半ばからは、「ジェンダーから世界を読む」という1・2年生を対象とした全学向けの講義が開講されました。今年度からはジェンダー論の専任スタッフが着任し、新たに開講した「ジェンダーと社会」には、400名近くの熱心な学生が集まりました。でも、残念なことに、社会の要請や学生の関心といったポテンシャルは非常に高いのに、全学的な取り組みやコアとなる組織づく

り、体系的なカリキュラムづくりの面では立ち遅れているのが実情です。

社会にとっても大学としても意義のあることだから、自分たちでやろうと、昨年春に動きだしたのが、このプロジェクトのはじまりでした。賛同する教員の輪を広げながら、上から与えられた課題としてではなく、教員たちの自発的な意思と意欲からスタートし取り組んでいることは、このプロジェクトの大きな強みだと思っています。GenEPは2005年度の学長裁量経費をもらって正式に発足、2007年までの2年間で一橋大学の特色を活かした教育プログラムを策定し、学長に答申することを目的とし、現在、奮闘しているところです。

4つの活動を核に、現状を把握、改善への糸口を探る

2005年7月に行われた全学ワークショップを皮切りに、GenEPはすでに具体的な取り組みを開始していますが、その中心となるのは、以下の4つの活動です。

(1) 研究科を超えたネットワークの構築および男女共同参画社会関連科目に関する現状把握



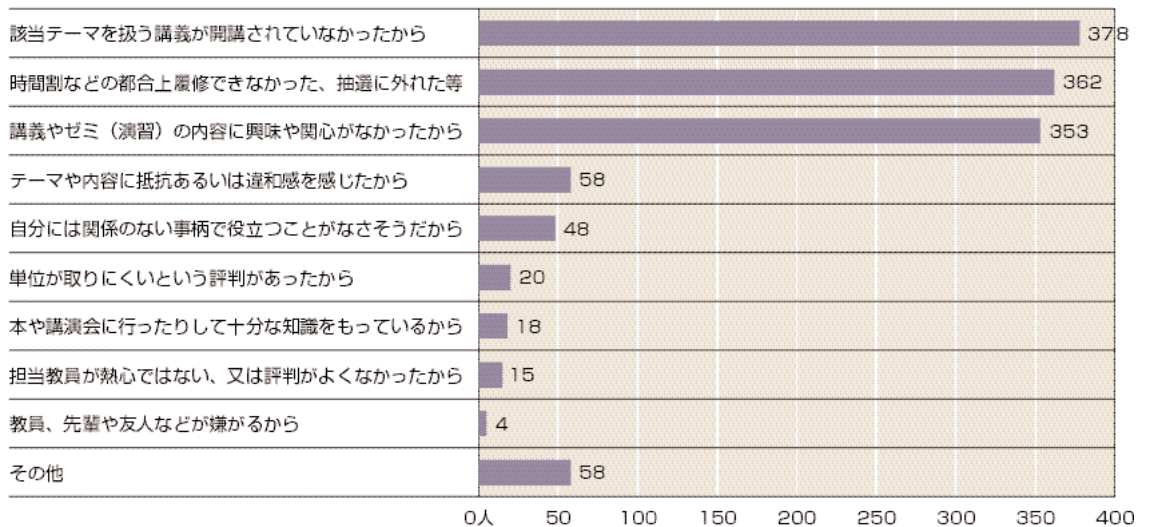
- (2) 学部生を対象としたアンケート(2005年10月に実施)
- (3) 男女共同参画教育への先進的な取り組みを行っている国内外の教育機関の視察調査および教育・研究ネットワークの構築
- (4) 男女共同参画教育をテーマとした公開講座の実施
全学的な教育プログラムづくりをめざすプロジェクトですから、他研究科との連携は非常に重要です。一橋大学ではすでに法学研究科の「ジェンダーと法」など、男女共同参画やジェンダー研究に専門分野からアプローチする講義がいくつも行われています。そうした講義をさらに有機的かつ効果的に連携させるべく準備を進めていきたいと考えています。

備を進めていきたいと考えています。

学生へのアンケート結果は、学生の関心の高さを裏付けるものでした。全般的にはやはり女性の方がやや関心が高いとはいえ、男女差は予想以上に小さかったといえます。むしろ注目すべきは、ジェンダーに関連する科目を受講しなかった理由として、「開講されていなかったから」「時間割などの都合上受講できなかった」とする学生が多数を占めている点です。GenEPはこうした学生の声に応えるべく、全学的に開講される講義等、カリキュラムのあり方についてもあらゆる可能性を探り、提言していききたいと考えています。

●非受講の理由

2005年全学調査(サンプル総数1058名・複数回答)



●GenEPの組織図(将来構想)



先進的な取り組みをしている教育機関としては、お茶の水女子大学、国際基督教大学などが知られており、東北大学や名古屋大学では男女共同参画への取り組みが大学行政の中に組み込まれています。GenEPではこれらの大学を訪問、取り組みの現状を視察するとともに担当者の方々と意見交換をしてきました。それぞれの良いところを参考にしつつも、一橋大学らしい「男女共同参画のかたち」を考えていきたいと思っています。

公開講座はすでに3回実施しています。今年1月には台湾大学婦女研究室長の林維紅先生をお招きして講演をしていただきました。学生や社会学研究科の教員だけではなく、他研究科の先生方にも多数ご参加いただきました。これからも公開講座やワークショップを開講し、関心の裾野を拡大していく計画です。これまでの活動については、3月末に刊行される中間報告書をご覧ください。また学生調査結果については、新学期にリーフレットを配布する予定です。

全学シンポジウム(秋)に向けて 研究科長インタビューをスタート

これまでの約8カ月間の取り組みを通して痛感したのは、一橋大学には優れた土壌があること、そしてそのポテンシャルを活かすためにはみなさんの関心をよりいっそう深めていくことが大切だということです。多忙な中

を公開講座やワークショップに駆けつけてくださった先生方、GenEPの志にエールを送ってくださる教員や職員のみなさん、アンケートに協力してくれた学生のみなさん、集計・分析などに時間と知恵をかけたリサーチ・アシスタントをはじめとする院生の方々など、頼もしい応援団の存在もこのプロジェクトに欠かせない推進力です。

新学期からのGenEPの取り組みの目玉は、これまでの視察の成果と学生調査からあがってきた要望を具体化するための総仕上げとなる全学シンポジウムです。さっそく4月からは各研究科でどのような取り組みが可能かについて研究科長にインタビューを開始し、秋に予定されているシンポジウムではそれぞれの具体案を提示してもらえるよう準備を進めていくつもりです。日本学術会議や国立大学協会は、男女共同参画社会実現に向けた動きを強力に推進しようとしており、一橋大学がこの時代の呼びかけにどのように応答するのが問われています。学術会議からも識者をお招きし、本学における男女共同参画教育の実現への跳躍台となるようなシンポジウムにできればと考えています。このような手順で学内の総意をふまえて、男女共同参画社会実現のための一橋大学ならではの教育プログラムを、丁寧に編み上げていきたいと思っています。



●GenEPの取組み

	学内	学外
2005年		
6月		6/29：国際基督教大学視察
7月	7/27：第1回ワークショップ (GenEP立ち上げ、学内現状把握など)	
8月		8/3：お茶の水女子大学視察
9月	9/26：第2回ワークショップ (調査票の検討、学内現状把握など)	9/22：名古屋大学視察 9/22～26：台湾大学ほか視察
10月	10/14：全学学生調査票配布 (学部生4,867名) 10/19：第1回公開講座「男女共同参画のかたち—企業に求められるCSR経営」 講師岩田喜美枝氏 (資生堂取締役執行委員・元厚生労働省雇用均等・児童家庭局長) 10/28：第3回ワークショップ 辻村みよ子氏 (東北大学21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」拠点リーダー)	10/5：早稲田大学視察
11月		11/26：東北大学シンポジウム 「大学における男女共同参画の現状」参加
12月	12/7：第2回公開講座「男女共同参画のかたち—日米の大学教育とジェンダー」 ホーン川嶋瑠子氏 (元スタンフォード大学「女性とジェンダー」研究所研究員、 お茶の水女子大学ジェンダー研究所客員研究員) 田中かず子氏 (国際基督教大学ジェンダー研究センター所長)	
2006年		
1月	1/11：第4回ワークショップ (学生調査結果の読解) 1/25：第3回公開講座「男女共同参画のかたち—台湾大学における教育実践」 林維紅氏 (台湾大学婦女研究室長)	



研究室訪問

企業を「主語」にして、人・組織・戦略から
企業生き残りの条件までを探る

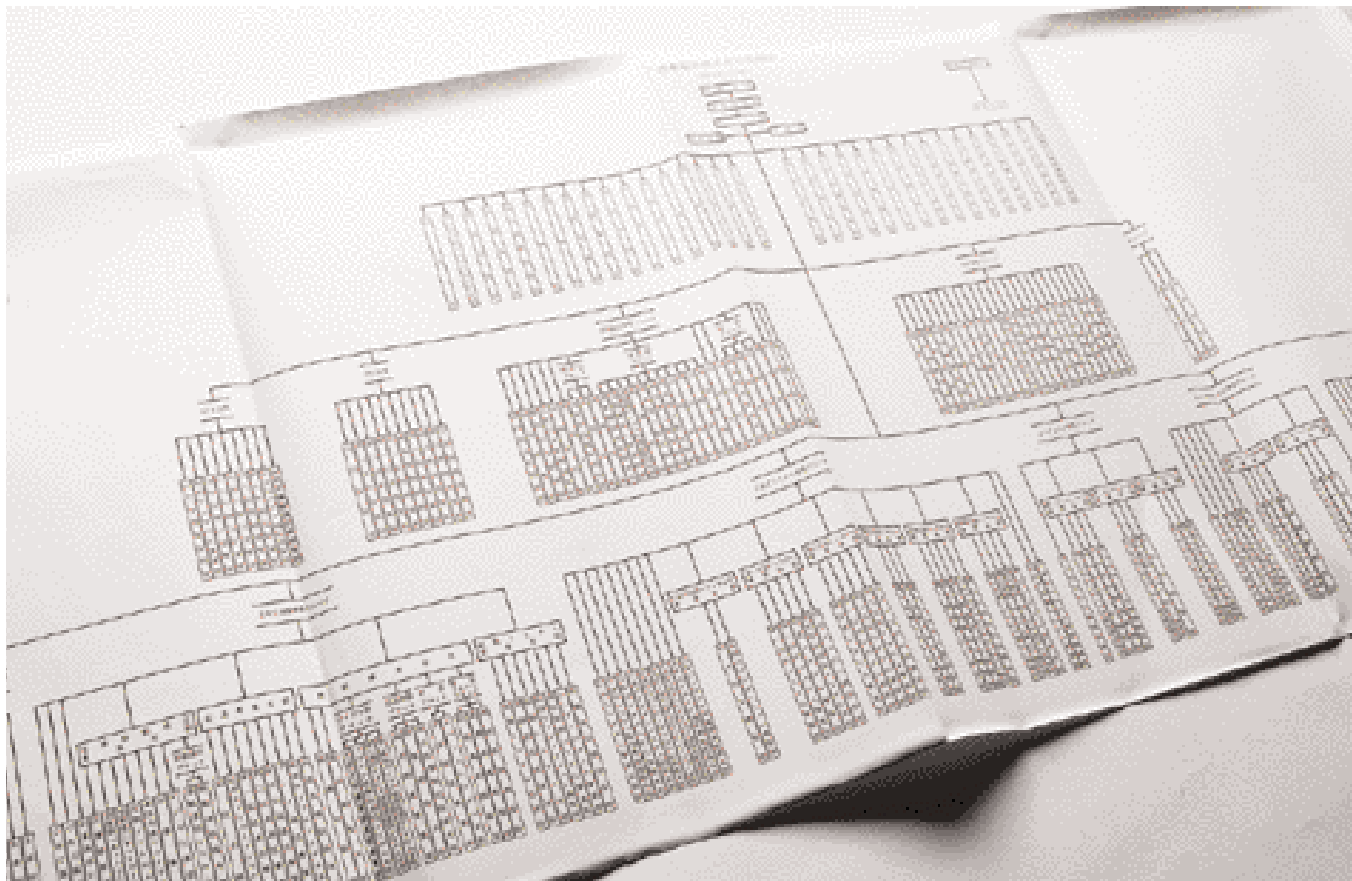
組織の中で働くということ ということか

自分の知らない時代のことや行ったことのない所を調べる——これほど刺激的なことはありません。ただそれだけでは経営史の研究になりません。過去によって現在を知ること、つまり自分たちが置かれている状況の中にある問題点からスタートして過去から学ぶ姿勢が重要なのです。

現在は市場化の時代です。これは今日になって急に起こったものではありません。19世紀も同様に市場化の時代でした。それが、少し違った方向に振れてきて企業が君臨する時代になり、また市場化に向かってきたのです。こうした流れを見ることによって、現在抱えている問題を単純化して分析することができるようになります。

私のテーマの一つは、組織の中で働くということか、ということ。歯車の一つとして機能しなければならぬかもしれない大組織の中で、人はどうして生きていけるのか。どのように品位や尊厳を保ち、働きがいを見付けることができるのか。それを学問的に受け止めて、企業の中の組織や仕組みはどう動くのか、組織の中で人はどう配分されているのか、それは時代や場所によってどう違うのかを探るのです。

かつて大企業は、安定の象徴でした。しかし、現在では大企



業といえども生き残れるかどうか分からない時代です。同じような特徴を持った企業でも、一方は成長を続け他方はつぶれてしまうということは珍しくありません。そこで研究の重点もシフトしてきました。どういう会社が生き残れるかという、もう1つのテーマがクローズアップされてきたのです。

いずれにしても組織の仕組みや処遇の仕組みは、場所や時代によって違います。それを比較することで視点が広がり、現代的な課題を分析する武器になるのです。

企業が生き残るための 3つの要因が見えてきた

企業が大きくなろうとする理由は効率の追求にあります。それは従業員の働きがいを損なうことでもあります。企業が君臨していた時代は、効率の追求などの経営努力という「自力」に加えて、経営環境などの「他力」に恵まれることで安定していました。

その他力が崩れることにより企業間格差が付いてきたのです。どういう仕組みで生き残れるかという生き残りの条件には、何らかの共通項があるはず。私は、他力が崩れた時点ですでに格差が付いていたと考えています。例えば、保護されていた状況から解放されて競争がスタートした業界にあっては、保護されていた故に一見同様な企業力に見えても実はすでに優劣が付いていたのです。その要因は、3つあると考えます。

1つは、イノベーションや組織改革など他企業と違うことをやってきたということです。それまでは、他企業と同じことをやるのがスタンダードだったにもかかわらず自己変革を進め、競争への準備ができていたことです。

2つ目は、株主至上主義という「人々の新しい働く目標」を提示したことです。

日本の経営失敗論が幅を効かせていますが、生き残っている

企業はある種のマネジメント転換を行っています。日本の経営とは違ったことをやっているようですが、それは成果主義の導入が奏功したというわけではありません。いつの時代でも、どんな場所でも自分の利益を度外視して働く人はいます。自分のためだけでなく仕事のために働く人です。成果主義は、その対極にある自分のために働く人をターゲットにしています。言い換えればさぼっている人を働かせる仕組みです。仕事のために働く人にとっては、決してインセンティブになりません。

株主至上主義は、「会社のために働く」を「株主のために働く」に昇華したようで、これがうまく機能したといえるでしょう。

3つ目の要因は、正直言えばまだ明確に見えていません。ただ、これまでの仕組みのままでは生き残れないのは確かで、それを打開するのはダイナミズムではないかと考えられます。

経営史で企業を内部から観察し 商業史で外部からアプローチする

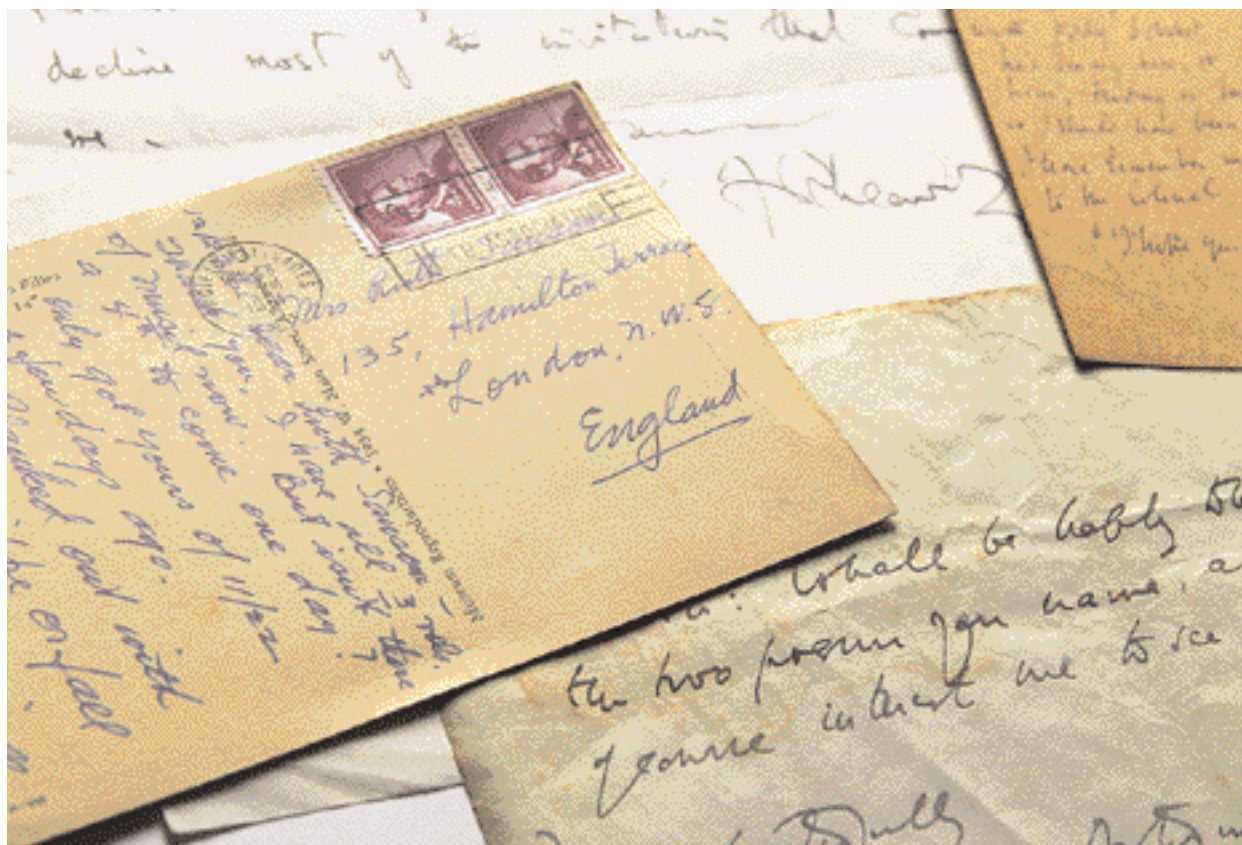
実は数年前に大腸ガンを患いました。ちょうどフランスの大学から招聘されていて、荷造りも終わり講義録はすでに送っていて、来週にも出発という時期のことです。「フランスに行きたしと思えども……自分に帰りのチケットはあるのか」。すべてをキャンセルして入院。転移が進んでいましたが、幸い大事に至りませんでした。もう1つの人生を得た思いでした。そこで好きなことを始めようと、「近代的経済発展の歴史」（商業史）の研究を始めました。

経営史が会社の組織や戦略など内部に迫るのに対して、商業史は会社に外部からアプローチするわけです。この2つのアプローチを行うことで、新たな視点を見出すことが可能です。しかし私にとって商業史はあくまでも趣味の範疇としてとらえています。なぜなら私の研究は、あくまで「企業が主語」だからです。（談）

商学研究科教授
鈴木良隆
Yoshitaka Suzuki

一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位修得、東北大学助教授、同教授を経て、現職。その間にシェフィールド大学客員教授、London School of Economics 客員教授、L'Ecole des Hautes Etudes en Sciences sociales 客員教授などを歴任。現代の企業史・比較経営史を専攻し、現代大企業体制の歴史と18世紀のヨーロッパ産業への東洋の物産の影響を研究。





20世紀初頭、イギリスは西洋近代文明の坂を登りつめた



言語社会研究科教授

井上義夫

Yoshio Inoue

1946年生まれ。

1969年一橋大学経済学部卒。

1974年同大学院社会学研究科博士課程退学。学術博士。

著書に『評伝D.H.ロレンス』（全3巻）、

『村上春樹と日本の「記憶」』等。

1996年和辻哲郎文化賞（一般部門）受賞。

第一次世界大戦の終結とともに 近代文明は終焉を迎えた

「不幸にも今日、人間という動物が、自然を美しくしたり飾ったりする代わりに、存在すること自体によって自然をおぞましいものに変える唯一の動物であることが、白日の下に明らかになった」（『文明、その原因と治癒』）

「不幸な患者を数時間のあいだ（せいぜい良くて数日の間）生かしておくために医者と看護婦と患者の親戚によってなされる、あの頻頻と見られる意味のない陰謀が止まることあるだろうか。その不運な病人の方は十中八九、何もせずに出来るだけ安らかに死んで行きたいと願っているにも拘らず、（無防備のために）手術や注射や、その他あらゆる種類の医学的辱しめに晒され、最後の最後まで拷問を受け続けるのである」（『愛と死のドラマ』）

いささか過激な言葉で、まるで現在の環境破壊と過剰医療の問題を言い表しているようですが、実は100年近く前イギリスの思想家エドワード・カーペンターが書いた言葉なのです。彼は

近代文明を総体として俎上に載せ、「進歩」の概念と西欧の「科学」的発想自体を批判し、宇宙と生命の根源から発して、人と生物・自然のあるべき関係を説き、女性の解放と社会進出を主張し、同性愛を自然な関係として肯定して自らも実践しています。2番目の文章が“The Art of Dying”という論に現れることから想像できるように、人はどうやって死ねばいいのか、死後に個々人の「意識」はどうなるのかという類の問題まで論じているのです。

つまり現在の時点で喫緊の課題とされている問題は20世紀初頭のイギリスでほぼ出尽くしており、逆に言うとそれだけイギリスは成熟していたことになります。

1914年に勃発した第一次世界大戦は、近代文明の総決算だったと言えます。4年以上に及んだこの戦争は、飛行機・飛行船による空からの爆撃、潜水艦・タンクの出現、毒ガスの使用など、近代科学の「粋」を集め、国民を総動員して戦われた戦争でした。僅か1週間のマルヌの戦いで独仏両軍が日露戦争で使われた全弾薬相当量を撃ち尽くしたことから解るように、そのとき人間の想像力の追いつけない、何か得体の知れないものが出現したのです。

この戦争によってイギリス社会の様相は大きく変わりました。その一つは、戦時中の非常措置が恒常化して女性があらゆる職種に進出したこと。もう一つは戦後の好景気のなかで、労働者階級の生活が飛躍的に豊かになったことです。『チャタレー夫人の恋人』で知られるD. H. ロレンスは、家庭にピアノをもつようになった鉱夫たちの生活を描き出していますが、そこに写し出されているのは消費にうつつを抜かす若者の姿です。男性はサッカーやチャールストンに、女性は新しいドレスに関心を傾け、満ち足りています。きれいな服を着て楽しめる金が欲しいだけだから社会主義者になるほどの「脳みそ」もないと言われます（第9章）。

日本の先鋭的文学者・思想家たちもまた同じ問題意識を共有していた

いまの日本と驚くほど似ているこの時代と社会を、同時代の日本の文学者たちも局部的ながら直感的に鋭く捉えていました。

例えば1900年頃イギリスに留学した漱石は周知の通り「個人」の問題を考えつめて神経衰弱になり、1909年の『それから』以降、個人と他者の問題を作品に言語化しましたが、これは世界的に見て最先端に行く試みだったと言えます。アナキストの石川三四郎は実際にカーペンターを訪ねていますし、白樺派の文学者たちもカーペンターに注目しました。

別の意味で興味深いのは、1924年から翌年にかけて発表された谷崎潤一郎の『痴人の愛』で、語り手の「私」がヒロインとなる女性に惹かれたのは、そもそもこのカフェで働く少女の名が「直子」などではなく「奈緒美」だったからです。しかも彼はその名を「ナオミ」と表記しますし、英語と西洋音楽を習わせ、一緒にダンスに興じ、「文化住宅」に住んで西洋的なライフスタイルに強く憧れます。ナオミは結局日本人には満足できず生身の西洋人に走りますが、登場人物の姿とこの作品を通して、ヨーロッパで問題になっていることが日本でも部分的ながら同時に、奇妙に歪んで進行していたことが理解できます。この小説が同じ谷崎の初期の作品に比べても、例えば翌年発表された川端康成の『伊豆の踊り子』に比べても、まるでアニメ映画でも観ているような錯覚を抱かせる低水準の作品であることも、70年ほど先の日本を見越した極めて「先進的」作品だった証しなのかもしれません。

人はどう生き、どう死ぬべきなのか 過去からの問いかけに、今どう答えていくか

20世紀初頭のイギリスの文学者たちが描き出した社会と人間のあり方は、いまの日本と驚くほど似ています。行き着くところまでいってしまった大衆消費社会、袋小路に追い込まれた文明社会の先に何があるのか、人はどう生き・どう死ぬべきなのか。D. H. ロレンスやT. S. エリオット、ヴァージニア・ウルフらは自らの文学の課題としてその問いに向き合いました。「二番煎じ」の状況にある現代の日本で、いま私たちは同じ問いを突きつけられています。現代文明の先に何があるのか、何が深刻な問題なのか、それをどう克服すべきなのか、この課題と真剣に向きあうことは、私たち一人ひとりにとっても、また研究対象としても実に興味深い、大切なことだと思います。（談）

経済地理学の空間理論理解をうながすゼミ指導求めて—— 学生とともに13年続く「海外巡検」



2003年：イルケシュタム。天山山脈の分水嶺を越え、タリム盆地側に入った所にある第一検問所（キルギス側）。国境はここから車で20分の先にある。



2000年：サトキラ（バングラデシュ）。日本の民間援助で運営されている小学校の児童たちと学生。



2005年：コソボ。博物館にある戦闘で使われた迫撃砲を調査する学生たち。漢字を発見、中国製とわかった。



1996年：克蘭ツ駅頭の情景（ケーニヒスベルク）。戦前のドイツの建物の前を、郊外電車を降りたロシア人たちが往来する。



2004年：ブラジル。日系人がセラード高原で開発した果てしなく続く綿花畑で元気いっぱいの学生たち。

海外のフィールド経験が、 学生の探究心を刺激する

何もない、大平原のように均等な平野で経済活動が行われたとき、そこに、都市集積や土地利用の差異という空間的な不均等性が自然に生まれるでしょうか。

生まれるのです。これを、経済・社会と、空間との関係から説明するのが、私のやっている学問です。私は、「経済・社会への空間の包摂」という経済地理学の空間理論を構築し、講義「経済地理学」のテキストである『経済・社会の地理学』（有斐閣）などに提示してきました。

一橋には、地理が好きで来る学生が毎年います。私は、領域・境界・距離・空間統合・集積・建造環境など、経済地理学の空間理論がもつ基本概念を生かしたゼミ指導をどう展開したらよいか、はじめのうちずいぶん模索しました。外国の本を読ませても、あまり学生の目は輝きません。

経済地理学は、空間理論を探索すると同時に、フィールドでそれを確かめる学問でもあります。あるとき私の研究フィールドである香港の話をしましたら、行ってみたいという声があがり、皆で、中国返還を控え不安たれこめる香港や、経済特区として開発が進み始めていた深圳を視察しました。今から17年前のことです。これはその後、92～94年まで計4回続きました。

海外の知識は書物からだけ得ていた学生にとって、自身で海外のフィールドを経験するインパクトは大きかったようです。学生は大きく変わり、「将来の生き方が見えてきた気がする」と言う学生もいました。

このなかから、これをゼミ活動の中心プロジェクトにしたいという課

題意識が芽生えてきました。地理学や地質学で学術的な現地視察を「巡検」といいます。これにならない、私のゼミでもこれを「海外巡検」と呼ぶことにしました。

96年より、巡検レポートのweb配信をスタート

95年には、日本工業大で経済地理学を担当された竹内淳彦先生のゼミからお誘い頂き、現代財閥の拠点の蔚山、ソウル周辺の工業開発地区など、韓国と一緒に視察しました。

翌年からはプロジェクトをさらに発展、私自身も初体験の場所を目的地に含め、成果をwebで広く配信するようになりました。これに際し、93年夏、ゼミ生有志とピルマを訪れて英国植民地主義の遺構と鎖国経済を視察し、また94年の夏に市場経済が導入されたばかりのポーランドとチェコで社会主義の都市空間と産業をつぶさに見た経験とノウハウが役立ちました。

96年は、ソ連解体直後のバルト三国などに学生を連れてゆきました。リトアニアの国会前にはソ連軍戦車を阻止したバリケードがそのまま残り、1945年からソ連支配下で外国人立入禁止となったケーニヒスベルクの、カントも一生を過ごしたドイツの面影が残る姿は、痛ましいものでした。

webは、共同研究室のPCに米国製ソフトを入れ、サーバに仕立てて配信しました。普通のPCを24時間稼働させたので、いつダウンするかひやひやでしたが、FM/Vはよく働いてくれました。まだ大学公式ウェブサイトをすら無かった頃です。この年は、一部だけ学生に作らせ、全体報告はすべて私が書きました。

97年はタイとラオスに行きました。そして、カナダ極北部の先住民イヌイットの生活領域と資源開発との葛藤などの問題を学んだ98年から、ホームページは、ゼミ討論をふまえ、学生に署名原稿として書かせることにしました。

テーマと目的地は、学生が決めます。ベトナムと中国に行った99年まで、前年度末に新4年が決めていましたが、2000年からは、4月に新ゼミ生がプレゼン競争で決めるシステムにし、学生のモチベーションはさらに高まりました。

ゼミは、主・副・そして基礎ゼミ生が一体です。他学部生も多くなります。そこには、学年という縦の壁も、学部という横の壁もありません。2000

年には、優秀な2年の女子が、マイクロクレジットとNGOを勉強したいと提案、全ゼミ生を説得して、バングラデシュなどに行きました。

農村の女性に融資し起業させるマイクロクレジットの目論見ですが、年利は15%超のサラ金なみで、5人組の連帯責任で返済します。出発前の夏学期には、訪問国の歴史・経済・政治を、合宿も交えゼミで十分に勉強します。マイクロクレジットを肯定的に評価する文献も多かったのですが、フィールドで現実を見た学生の間には、疑問がわき起こりました。これは、私にとっても重要な知見でした。

未だ見ぬ地に赴く舞台裏の準備に、蓄積したノウハウ

目的地がどこに決まるか、私自身も4月まで予測できません。遠方の外国に下見には行けません。学生には厳しい予算制約もあります。このような条件下で巡検を準備するノウハウは、回を重ねるにつれ蓄積してゆきました。

行き先が決まるとまず、世界的に定評あるガイドブックLonely Planetなどで概要をつかみます。次に、学生から提案が出た訪問地をうまく結んでルートを決め、現地の宿や乗り物の手配をし、現地企業・諸機関のアポをとります。

手配は、現地旅行社をみつけ電子メールで直接交渉です。旅行社は基本的に各国別なので、訪問国が増えると交渉する旅行社数が増して大変です。メールを出しても、現地からすぐ返事は来ないことも多く、そのときはしばらくおいて国際電話します。やっと価格提示にこぎつけても、高すぎれば他社と交渉のやり直しです。05年にバルカン方面を巡検したときは、マケドニア・アルバニア・コソボを担当してくれる適切な価格の会社がなかなかみつからず、契約成立は出発の2週間前でした。契約後、学生から旅費を集め、私が海外送金します。一般に米ドル建ですが、バルカン巡検ではすべてユーロ建で、新たな基軸通貨として台頭するユーロを実感しました。アポとりは、現地旅行社に任せることも、私から直接することもあります。

こうした舞台裏の仕事は煩雑を極め、学生には任せられません。すべて私が1人でやります。

準備や現地で、これまで、如水会サンパウロ支部とバンコク支部・日本・スロヴェニア友好協会・日本ブラジル中央協会・海外技術者研修協会はじめ、諸団体や関係の方々にお世話になりました。この場を借りあつく御礼申し上げます。

準備がすべて調うと、それだけで肩の荷がたいぶ下り、ほっとします。

安全対策、トラブル対策に最善の注意をばらう

現地に出かけるのは、航空運賃がシオルターになった8月下旬から9月上旬です。現地では基本的にすべて英語でコミュニケーションをとります。英語が通じにくい地域では、出発前に私が現地語を数ヶ月かけて勉強することもあります。ロシア語、ポルトガル語などは、成果が現地でそれなりに役立ちました。

英語という学生は驚きますが、一橋生だけあって、単語・文法力は多くの学生にあります。無いのは、英語でコミュニケーションをとろうという意欲と度胸ですから、現地でしばらくすると、慣れてきます。

費用対効果を効率化するためきつめの行動日程にもかかわらず、ほと

んどの学生は体調も崩さず、最後までしっかり日程をこなします。一日の行動が終り、夕食の食卓を囲みながらの現地ゼミもよくあります。

海外での安全は、予想されるトラブルと対策をまとめた、11ページに及ぶ印刷物を配り、出発前によく説明します。効果はてきめんで、これまでトラブルに巻き込まれた事例は全くありません。

「境界」がテーマの1つであることもあり、国境はできるだけ陸路で越えますが、これが厄介です。旅行社の経営が国単位なので、辺境の国境越えは多くの場合自力でなくてはなりません。係官は往々にして腐敗しています。それだけに、難しい国境越えを無事こなし達成感は、かなりのものです。キルギスから天山山脈を抜けウイグル自治区（中国）に入ったイルケシュタム越えは、一生忘れられないでしょう。

巡検は、現地集合・現地解散です。解散後、バックパッキングの自由旅行に挑戦する学生もいます。安全に解散できると私は2度目にはっとします。

巡検の目的は、その背景にある経済・社会とその空間関係の洞察

現地に行くのは、視察やインタビューで資料や情報を収集するためです。旅行自体が最終目的ではありません。

冬学期になると、毎週のゼミで、学生が用意する巡検報告書草稿を、1日につき4～5時間かけてじっくり検討し、ホームページの原稿を作ります。その成果は、<http://econgeogmisc.hit-uac.jp/excursion/>でご覧いただけます。意欲ある前期学生が書いた学年末チームペーパーは、私が学内誌『一橋』に推薦し、しばしば入選しています。

学生は、現地で聞いた話はまとめられても、フィールドで観察して主体的に何かを見出すのは、まだ苦手なようです。ゼミでは、可視的なものの背後にある経済・社会とその空間関係を洞察する鋭い目をもて、と常に学生に言い聞かせています。

私のゼミは、ハードが得るものは大きいという評価が定着しているらしく、覚悟して門をたたく学生は個性にあふれています。ある年度は、全員が後期日程入学者でした。申し合わせたわけでもなく、1クラスしかないロシア語選択者が大多数を占めた年もありました。

1年間が終わったとき、ゼミに参加し意義があったとお世辞でなく感謝の言葉をかけてくれるのは、専門分野で学生という珠を磨くことを職務とする教師冥利に尽きる思いです。基礎ゼミ修了後に如水会短期留学生になったり、卒業後に国際関係の仕事に就いたりする学生もいます。

これからも、ゼミ学生とともに海外各地に赴き、一橋大学の国際化に、微力ながら貢献したいものです。



経済学研究科教授

水岡不二雄

Fujio Mizuoka

1951年生まれ。1975年立命館大学経済学部卒業。1977年一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。1979年から1981年まで香港大学文学部地理及地質学系で教鞭をとる。1986年クラーク大学地理学部大学院（フルブライトプログラムによる留学）よりPh.D.（地理学）学位取得。1987年一橋大学経済学部助教授、1992年同教授。経済地理部専門所属。

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第10回は、弁護士の三吉尚子さんにご登場頂きました。

聞き手は言語社会研究科のイ・ヨンスク（李妍淑）です。

法律だけではない視点をもてる柔軟性や さまざまな人生経験も法律家には必要な要素なのだと思います

都庁職員、主婦業、海外生活を経て法律家に。
その場その場で自分が良いと思った選択をただけです

イ 三吉さんはご家庭をもちながらずっと弁護士をつづけてこられました。大学に入学したときから、将来は弁護士と決めていらしたのですか。

三吉 何となく弁護士になろうかなとは思っていました。ただ、周りに弁護士はいませんでしたから、こういうことを勉強してこんな弁護士になろうといった具体的なものではありませんでしたね。弁護士が活躍する海外のテレビドラマに触発されてというのが、最初の志望動機だったぐらいですから（笑）。

イ いま一橋大学の法学部は女子学生が40%近くを占めていますが、三吉さんの頃は少なかったでしょう。一橋大学を選んだのは、どんな理由からですか？

三吉 私の頃は同学年の女性は4学部併せて16人。人数が少なかったせいもあって、交流はいまでもつづいています。法学部は8人で、うち3人が弁護士になりました。私は長野県の出身で、高校は1クラスに女子は3人という男子校でしたから、男女比というのを意識したことはなかったんです。一橋大学については全く知識がなくて、担任の先生に「いい大学だから受けてみないか」と言われて初めて知りました。それが、受験前にキャンパスを見に来て、静かで緑豊かな環境に魅せられてしまった。「ここが私の大学」と、なぜかごく自然に思えたんです。

イ 弁護士になられたときは、すでにご結婚されていたそうですね。

三吉 私はストレートに弁護士になったわけではないんです。大学在学中、司法試験に挑戦しましたが、あえなく敗退（笑）。卒業後は3年間、都の公務員として働きました。地方勤務の夫と結婚のため、退職し、地方へ行きましたが、そこでもう一度受けようと思ったんです。一度だけと決めていましたから、この間は今までで一番勉強しましたね。合格はしましたが、その後夫の海外勤務についていきましたから、司法修習生になったのは日本に戻ってきた7年後でした。

こういうと「すごい信念ですね」とか「残ろうとは思わなかったんですか」などと言われますが、私はその場その場で自分が良いと思う選択をただけ。こうすると決めたら、後はただ



三吉尚子（みよし・ひさこ）

1974年一橋大学法学部卒。東京都庁入職。1977年都庁を退職し、夫の勤務地の神戸へ。

主婦業に専念するかたわら司法試験の受験勉強を始める。

1979年司法試験合格と同時期に夫の海外赴任が決定し、渡米。

7年のブランクを経て帰国後の1987年司法研修所入所。1989年弁護士登録、現在に至る。

流されるだけ（笑）。でも、正直、司法修習生としての生活や勉強の面では7年間のブランクはキツかったですね。

イ でも、ある意味では大事な時期だったのではないですか。海外での生活や子育てといった人生経験がお仕事の上でもプラスになっているように思えますが。

三吉 そうですね。子育てを経験して、親子の感情や子どもをめぐる問題がよくわかる、理解が早いという面はあります。

イ 私が三吉さんのキャリアを素敵だと思うのは、使命感をもちながらも新しい状況に柔軟に対処され、じっくり選択していかれたことです。勝ち組・負け組という言葉が流行りましたが、いまの学生は、こうと決めたレールに乗っていくことにこだわっている。そこからちょっとそれたり、遅れたりすることを非常に恐れるんです



ね。柔らかに向かい合うから力がでるということも理解してほしいなと思います。

三吉 司法試験は資格試験だから、自分の人生に合わせた取り組みができたというラッキーな面はあります。でも、イ先生が指摘されたように、社会や人間のさまざまな相貌と関わる仕事ですから、人生経験はプラスになる。現に、さまざまな社会

経験を積んでから40代で司法試験を受ける人も増えている。それぞれの経験を活かしたい仕事をされていると思います。

選択はあくまで当事者がするもの。 説明はしますが、説得を目的とはしません

イ 三吉さんは、離婚や相談、ドメスティック・バイオレンス（DV）といった家事事件を主に受け持たれているとお聞きしましたが、ご自分で専門として選ばれたのですか。

三吉 これも自然の流れに近くて、司法修習を終えて所属した事務所が、日本で最初の女性だけの弁護士事務所だったためなんです。昭和30年代の設立ですから、当時は弁護士事務所のドアを叩くのは、いまよりもっと抵抗があった。女性弁護士の方が相談しやすいと、大勢の女性たちが相談に押し寄せたそうです。でも、例えば企業法務をやりたいと思ったことはありませんし、いまやっていることが自分のやりたいことだったのかもかもしれませんね。

イ 1989年から弁護士をしていらっしゃるわけですが、当事者の意識の変化など、時代の影響を感じられることはありますか。

イ・ヨンスク (李 妍淑)
言語社会研究科教授



三吉 バブル期には不動産がらみの事件や財産保全の相談が多かったですね。例えば、離婚事件であっても、夫が勝手に不動産などの財産を処分しないようにと、保全の手続を取ることから始めましたが、いまでは不動産は夫婦の共有名義としている場合が多く、保全手続は必要なくなりました。女性が収入を得るようになったという社会の変化が大きいです。DVに関しては、言葉自体が社会的認知を得たため、被害を受けている人が相談しやすくなったと思います。

イ DVにあっている女性は、自分が悪いからだと思うケースが多い。訴えることは勇気がいりますが、声をあげれば周りがサポートしやすくなりますね。

三吉 最近でも、自分が悪いからだと思う女性が多いし、暴力を振ったという認識すらない男性もいます。ただ、以前は独立した子どもとか実家とか、まず逃げ場を確保してから離婚というケースが多かったんですが、最近では逃げ場がなくても行動する人が増えていますね。

イ 離婚やDVなど、いわば人生の修羅場に関わっていくわけでしょう。精神的にキツくはありませんか。知人の娘さんの精神科医は、毎日辛い話を聞かされ、自分が病気になってしまいました。

三吉 確かに修羅場やパニックに遭遇する場面は多いですね。離婚にしても双方が納得の上のことなら、まず弁護士に相談にはきかせん。一方的に離婚を切り出された方してみれば、混乱もするし精神的な動揺は激しい。嫌がらせや営業妨害に近いことをされるケースもありますね。

私は弁護士の役割は、クライアントの求めるものに添うかたちで解決をしていくことだと思っています。自分だったらスッと離婚してしまうのと思うこともある（笑）。家裁の調停員の方に、説得はしないんですかと聞かれることもあります。説得することが目的ではありません。こうしたらこうなりますと、



キチンと説明はしますが、選択するのはあくまで当事者なんです。

イ お仕事から男勝りの怖い方を想像していましたが、三吉さんはとても女性らしい方なので安心しました（笑）。韓国ではお喋りで遅い女の子に対して、大きくなったら弁護士になるといいねと言ったりしますが、弁護士という仕事にはやはり雄弁であることは必要なんですか。

三吉 論理的に話せること、感情的にならないことは必要ですが、特別に弁が立つ必要はないと思います。でも、闇金を相手にするときなど、つい大声で怒鳴ってしまうこともある（笑）。怒鳴っても事は解決しないんですけどね。

何かおかしいと思ったら、自分の判断と責任で行動できる。
私がこの仕事に魅力を感じている理由です

イ 事件や相談などは何件くらい抱えていらっしゃるんですか。

三吉 家庭のことで忙しい時期は減りましたが、平均して30件前後ですね。解決までには早くても半年、長いと数年かかりますからどうしてもそうになってしまう。取り組み方でいえば、すぐに行動した方がいい場合もあれば、じっくり考えることが必要なこともある。これもケース・バイ・ケースですね。

イ 30件前後というのはかなりのハードワークですね。それだけ弁護士が不足しているということでしょうし、司法試験の制度の改正も法曹を増やすことを目的として実施されています。こうしたことについてはどう思われますか。

三吉 私の所属する事務所でも法科大学院の学生の研修を受け入れています。現実的には難しいなと思うこともあります。学生ですから、被疑者の接見といった資格が必要な場面には携われませんし、期間的



にも短い。どうしても一部分を任せるといふかたちになってしまいます。いま、司法試験は、受験塾を利用する受験生が多く、合格答案を書く勉強に走り過ぎているようです。司法試験を行う側にいる方が「金太郎飴のような答案」という表現をされました。法曹には法律的な知識はもちろん必要ですが、紛争にしても条文に基づいた解釈だけでは解決しないケースも多々あるんです。法曹を志す人は、法律だけではない視点をもてる柔軟性やさまざまな人生経験といったものも大切にしてほしいと思います。

イ 日本の人間関係は情を基本としていると言われますが、いまは距離の取り方が難しくなっているように思います。一方で、世の中の変化によって新しい法律もどんどん増えている。弁護士の仕事はますます複雑になっていくのではないですか。

三吉 六法全書は年々厚くなっています（笑）。個人情報保護法にしても、いま一種の混乱が生じているでしょう。新しい法律が社会に溶け込み、適合していくには、やはり時間が必要なんですね。その一方で、現実の社会や生活、事件は日々動いている。弁護士としては、どんなスタンスをとっていくのが重要になっていくと思います。離婚に伴う子どもの親権や面接権にしても、アメリカ型の両親の家で交互に暮らす方向へ進めていくことが果していいのかどうかといった問題もある。不登校の子どもたちにしても、学校側が何をしたいのかわからない、こんなことをしたいのかと相談にくるケースもあります。何をどう守るのか、社会全体に自分の判断をしっかりとたなくなっていく傾向がみられるのは怖いことだという気がしますね。

イ 三吉さんご自身が弁護士という仕事にやりがいを感じていらっしゃるの、どんな点ですか。

三吉 事件を引き受けるかどうか、どう進めていくか、など、仕事の処理に自分の判断が反映されることですね。当然、それだけの責任は伴いますが、一つのケースを自分の判断で動かしていくことに、魅力を感じているのだと思います。見返りのない、結果の出ないケースも少なくないんです。弁護士を続けているのは、正義感というより、何かおかしいと思ったら、そこに何かをしていきたいというこだわりだと思います。

対談を終えて

対談を終えると、透明感あふれる余韻が残りました。三吉さんからは、私が弁護士という職業に抱いている先入観とはまったく異なる柔らかさを感じられました。とくに印象的だったのは、無理な力みのない自然体を保ちながら、さまざまな経験を生かし

て弁護士という道に進まれたことです。「その場その場で自分が良いと思う選択をしただけ」とおっしゃる三吉さんには、人との競争に打ち勝ちたいとか、大きなことをやってやろうなどという雑念や気負いがまったく見当たりませんでした。三吉さんには、まるで自分のやりたいことが自然にやってくるような印象さえももちましたが、きっとその裏には地道な

努力の積み重ねがあったにちがひありません。そうした努力の積み重ねが、人生の節々にチャンスと呼び寄せたのではないのでしょうか。でもそんなことを言うと、きっと三吉さんは「ただやってみただけですよ」とすがすがしい笑顔でお答えになるかもしれません。三吉さんのますますのご活躍を心から応援したいと思います。（イ・ヨンスク）

個性は主張する

One and Only One

第 11 話

帝京大学経済学部教授／イタリア共和国カヴァリエーレ（騎士）

まさのぶ
中村正董氏



M a s a n o b u
N a k a m u r a

イタリア共和国から贈られた カヴァリエーレ章とは

昨年11月、イタリア政府からカヴァリエーレ章という功勞勲章をいただきました。カヴァリエーレというのは、フランス語でいえばシュバリエ、つまり騎士のことですが、イタリア共和国の騎士になったからといって、特別な恩典があるということではないようです。よくは分かりませんが、まあ、一種の名譽称号のようなものなのでしょう。それにしても、こういう勲章がなぜ授与されたのか。1989年から



ラテンを知ることが、
日本がこれからの国際社会で生きていくうえでの
大きなヒントになる。

97年まで、日伊間の貿易と投資の促進を目的とする「日伊ビジネスグループ」という民間の国際機関で日本側の事務局代表を務めていて、その間に、なぜかは知らねど、日伊間の貿易が大幅に伸びた。日本からイタリアへの投資も増えた。表向きには、そうしたことが評価されてのことのようです。しかし、正直なところ、これは私がなにかをしたからということではありません。たまたま私の在任中に、日本に「イタリア・ブーム」が起き、日本人がイタリア好きになってくれた。そのおかげだと思っています。

そもそも日伊ビジネスグループの日本側事務局代表という職務も、降ってわいたような話でした。

当時、日本企業の対EU投資はイギリス1ヶ国に集中していて、ドイツ、フランスがその半分、イタリアはそのまた半分もいってなかった。こういう偏りに対して、イタリア政府は強い不満もっていた。経済力という点ではイギリスもドイツもフランスもイタリアも大差はない。それなのになんでだというわけ。これにはそれなりの背景もあって、たとえばイタリアの主要輸出品目である皮革製品に対して日本ではさきめて高い関税をかけている。一方、日本が得意とする自動車については、イタリアにはフィアットという「帝国の中の帝国」と呼ばれる自動車メーカーが君臨していて、そう簡単に乗り込めない。そんなこんなで貿易も投資も滞っていたんですが、こういう偏りは、EU市場が統合されると新たな貿易摩擦の火種になりかねない。さりとて、政府間交渉で解決しようとするやと逆に問題をこじらせることにもなりかねない。そこで、通産省が、民間企業に呼びかけて、民間対応でよろしくやってくれということになったんですね。

参加企業は商社、銀行、自動車、電機など約30社。いずれも日本を代表する大企業です。そういう大企業のトップが集まると、話は速いんですね。経済同友会的小林陽太郎さんが、じゃあ千野チャン、代表はあんたがやっつてよ、てな調子で組織の大枠はあっさりと決まっちゃった。この千野チャンというのが、大和証券の当時の会長だった千野宣時で、私のボスでしたから、おい、中村くん、そういうことになったから、事務局の代表はきみがやってくれ、ということで私のところにお鉢がまわってきた。

日本の企業の国際進出の露払いをしてきた

私が大和証券に入社したのは昭和34年。日本が高度経済成長へのとば口に立っていた頃のことです。田舎育ちで、正直、証券会社が何の会社なのかも知らなくて、ゼミの先生に行けと言われて行ってみたら、その日のうちに内定が出てしまった。当時はまだ就職難の時代で、

内定が出たら断ってはならないということが就職活動のルールになっており、そのまま就職となりました。

4月1日に初出社したら、いきなり真夜中の11時まで残業をさせられて、そのまま40年間ずっと、土曜も日曜もなくこきつかわれてきた。ひどい話です。それでいて、当時の同僚が集まると、みんなが異口同音に、われわれは面白い時代を生きてきた、恵まれていたという。日本の戦後の国際化がどんどん広がっていた時期に、われわれはいつもその先頭を走らされてきた。しかし、そのかわり、とりわけ国際金融の最先端は無法地帯のようなもので、たいていのことが好き勝手にできた。ずいぶん危ない橋も渡ってきましたが、少々の勇み足は、全体としての経済成長が帳消しにしてくれたんですね。

初めての海外赴任は昭和44年、ロンドンの駐在員事務所でした。職員は5人。うち3人が奇しくも一橋の同期同窓生だったんですが、この3人が実によく働きましてね、一時は全ヨーロッパにおける日本株の4割までをこの3人で取り仕切っていた。当時はまだそんなに資金に余裕のなかった日本企業がヨーロッパに進出する、いわば露払いのような役割を果たしたんじゃないかと自負しています。わずか5人でスタートした駐在員事務所もたちまち20人になり、50人になり、10年ほどの間に500人にまでふくれあがり、シティの目抜きにビルを構えるまでになった。時の勢いというのはそういうものなんですね。

日本人は世界にもまれな語学の天才である

仕事に多少のゆとりができた頃、せっかくヨーロッパに来ていることでもあるし、フランス語でも勉強しようじゃないかという話がありました。私も、ドイツ語は大学時代に第二外国語でかじっていて、なんとか使えたんですが、フランス語はからきしダメだったんですね。所長もすっかりその気になって、よし、中村くん、美人の先生を探し出して、先生は美人にかぎるぞ、なんてことをいう。

そこで美人の先生をひっばってきたんですが、その先生というのが厳しいですよ。情け容赦なくビシビシやる。たちまちみんな音をあげて、すまん、今日はちょっと約束があってね、とかなんとかいって雲隠れして、ついに生徒は私1人になってしまった。私だっ





て逃げ出したかったんだけど、教室の幹事をしていて逃げ出すわけにはいかなかった。

仕方なしにレッスンを受けていたんですが、半年くらいしてフランスに行ったら、なんと、フランス人がしゃべっていることが分かるんですよ。聞き耳ずきんという童話があるでしょ。それをかぶるとヘビやカラスの言葉が聞き分けられるという。あの魔法のずきんをかぶったような感じでした。とたんに面白くなって、以降、仕事に役立ちそうな外国語の習得に二の足を踏まなくなった。おかげで今まで英、独、仏、中、伊、露の6ヶ国語を仕事で使いました。

これは私に特別な語学の才能があったからということではありません。日本人は中高大と10年間も英語の勉強をして片言の英語もしゃべれない、語学の才能に乏しいんだというようなことがまことしやかに言われていますが、私に言わせれば、日本人というのは世界にもまれな語学の天才民族です。論より証拠、日本人は世界のどこに行っても、現地の人と現地言葉で話し合っています。最初から話せたわけじゃないんです。話せたほうが仕事がスムーズに進むということが分かると、それも仕事のうちだと考えて、1~2年もすればだれもがペラペラになってしまうんです。こんな民族はほかにありません。私などはその末席を汚しているにすぎない。ちなみに、この対極にあるのがアメリカ人とイギリス人です。世界中どこでも英語が通じるから外国語に対する意欲がないんです。

こういうことに気づいて以来、日本の企業は英語のできない社員でも平気で海外に送り出すようになってきました。かつては英語のできる社員を優先して送り出していたんですが、へたに英語ができるやつより、仕事ができるやつのほうが結局はいい仕事をする。行ってしま

くすれば、まるでしゃべれなかった現地語もちゃんとしゃべれるようになる。なんの問題もないんですよ。

ラテン民族は いいかげんでもあり真面目でもある

ともあれ、こうしてフランス語に出会ったあと、東京からきた役員をパリに案内したりしていると、あいつはフランス語ができるぞという評判が立って、パリの支店長に任命されてしまった。昭和48年のことです。もちろん、仕事に使えるほどのフランス語じゃないことは

当の私がいちばんよく分かっていましたから、パリではフランス人の家庭に下宿することにしました。そして、ここで初めてラテンの世界というものを垣間見るようになった。イタリアも同じラテンの国ですから、そういう意味ではイタリアと私との関係もここから始まったとっていい。

日本人にとっての外国は、アングロサクソンかゲルマンかで、ラテンの世界はほとんど視野に入っていないんじゃないでしょうか。ついでにいえば、その向こうにスラブの世界があり、さらにその向こうにアラブ・

イスラムの世界があって、日本人はそういう世界についてはあまり分かってないんじゃないかと思います。

私がそうでした。ですから、下宿先で垣間見たラテンの世界には、ずいぶん驚かされたものです。フランスではごく平均的な家庭でしたが、たとえば朝、息子には部屋まで朝食を運んでやる母親が、娘たちには皿洗いをさせる。男尊女卑の考え方が躰けのベースになっているんです。亭主はアル中で昼間からワインを飲んでいる。庭先



の小屋にはアルジェリア人が住んでいて、近くの工場に夜勤専門で通っている。フランスの工場は、昼間はフランス人、夜間はアルジェリア人など外国人という交替勤務制で動いているんですね。

ビジネスの世界も、ロンドンとパリとではずいぶんちがいました。ロンドンで使っていたのと同じコンピュータの値段が、パリでは倍以上もするという。なぜだと訊いたら理由にもならないような理由をいう。問い詰めたら、あっさりロンドンと同じになった。パリの値段には概ね「交渉の余地」があって、しかもそれが大きいんです。マーケットで売っている野菜や果物だって、値札はあくまでも販売希望価格で、実売価格は交渉によって決まる。

外交官としてスペインに来ていた友人によれば、ラテン文化の特質は「80%主義」だということですね。80%達成できれば良しとする。なるほどと思いました。日本人は80%を最低ラインにして、つねに100%を目指す。しかし、人間のやることに100%なんてことはありえない。99%から先はウソの世界だと思うのですよ。それが80%でいいやということになれば、生き方がずいぶん楽になる。生活や人生に余裕ができる。だからといって飛行機が落ちやすくなるわけではない。離陸時間や着陸時間に多少の遅れがでて、そう大きな問題はないうんですね。

そのちょっといいかげんなぶん、彼らの宗教であるカソリックは、アングロサクソンやゲルマンのプロテスタントより戒律が厳しい。この逆比例は、私の見るところ、その先のスラブ、イスラムの世界ではさらに大きくなる。アラブ人などの暮らしぶりは一面ではまったく締まりがないんですが、宗教の戒律はものすごく厳しい。その面ではすごく真面目です。その両面を掛け算して見ないと、つきあい方をまちがえることになると思うんですね。アメリカがイラクを見誤ったように。

日本人はどんな文化も丸飲みができる

アングロサクソンやゲルマンの文化は、人間のいいかげんさというか、自然さに対する規制をどんどん強めることでつくりあげてきた文化だと思うんです。自分たちの牧場を柵で囲いこみ、オオカミの侵入を防いできた。ラテンの世界にも、同じヨーロッパのことですから、柵はあるにはあるんですが、かなりいいかげんな柵で、あちこちにほころびがある。柵の中では牛も羊もいっしょに草を食べていたりする。その柵が、スラブの世界ではつくりかけたままになっている。さらにイスラムの世界に行くと、なぜそんなものをつくるの？、ということになるんですね。

日本は明治維新以降、アングロサクソンやゲルマンの文化にならって、せっせと柵づくりに励み、お手本以上に立派な柵をつくりあげてきた。見たこともないオオカミが襲ってくるという恐怖感があったんでしょう。今もその恐怖感をひきずっている。しかし、日本人というのは、もともとは能天気な民族で、その意味ではラテン的なところがあるんですね。ものごとを分秒刻みで動かすなんてことは、ここ40～50年のことですよ。

日本人が語学の天才だというのも、こういう日本人のもともとの能天気さが土台になっているんじゃないかと思います。日本人はどんな文化も丸飲みにできる。現に丸飲みしてきた。これは、日本には民族のバリアも、宗教のバリアも、階級のバリアもないに等しいからです。言語は文化そのものですから、語学の習得も、その国の文化を丸飲みするのが一番の近道なんです。ふつうだと、ここから先は譲れないという一線があって、なかなか丸飲みにはできない。ところが日本人にはつかえる要素がまるでないんですね。だから、イタリアに行ったらイタリアの大ファンになってしまう。モンゴルに行ったらモンゴ



ルが大好きになってしまふ。その国の言葉もたちまち習得できてしまふ。その国の人もすぐ仲良くなれるんですよ。

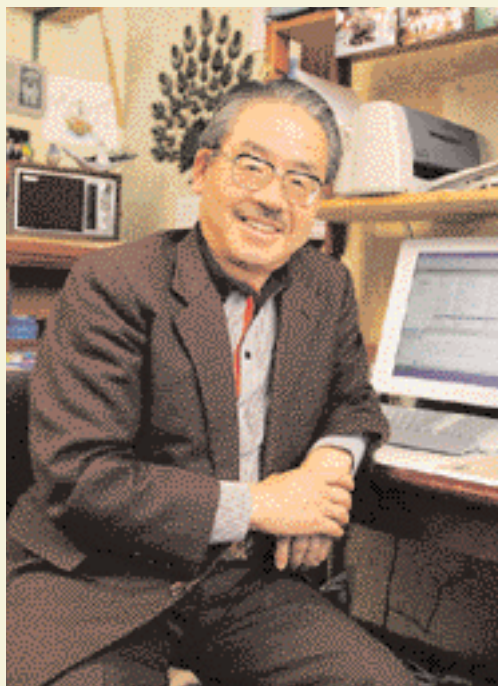
しかし、これは相手から見たら、日本人というのはどうもあやしげな人種で、人間としては信用しかねる、ということになるんですね。昨日はあっちを向いてニコニコしていたのが、今日はこっちを向いてニコニコしている。明日はどうなんだということになる。

実際、日本人はしばしば豹変してきました。明治維新がしかり、第二次大戦後がしかり。昨日まで乗っていた船が沈没しそうになると、あっさり見捨てて、別の船に乗り換えてしまふ。それもみんなが一斉に、特段の自覚もなしに、です。これは、ある意味では、相手を騙すことになるんですが、日本人はみずからを騙しているから、相手を騙しているという感覚すらない。そのあたりのことをちゃんと自覚しないと、これから先も日本人は国際社会で真の信頼をえられないだろうと思いますね。

世界中の人たちと仲良くやっていくために

話がどうも横道に外れてばかりいますが、日伊ビジネスグループで私が提案したのは、第三国協力をやろうじゃないかということでした。日伊がテーブルの向こう側とこっち側に分かれて話しあうと、どうしても喧嘩腰になりやすい。そうならないように、日伊でタッグを組んで、たとえばチェコとかタイとかに出かけましょうよと。日伊それぞれの人脈や商脈を相互利用しましょうよと。そうすると、第三国にとってもメリットが大きいし、なによりテーブルのこっち側に日伊が並んで協力しあうことになる。自然に仲良くもなれるというわけです。それでなくても、イタ

One and Only One



◆中村正董（なかむら・まさのぶ）

1936年栃木県生まれ。59年一橋大学経済学部卒業。同年大和証券に入社。国際金融部次長、大和証券投資顧問（株）取締役、米国大和証券信託（株）会長兼社長、（株）大和証券経済研究所常務、大和総研（株）常務などを歴任。その間、ロンドン、パリ、アジア地区、ニューヨークに赴任。訪問国数は40ヶ国以上。英、独、仏、中、伊、露の6ヶ国語を使いこなす。88年から97年まで大和日英基金（約60億円）事務局長、89年から97年まで通産省「日伊ビジネスグループ」日本側事務局代表を兼務。日伊貿易はその間に大幅に改善された。97年、新設の新潟大学留学生センター教授に就任。留学生教育の一環として学

リア人というのはそう背も高くないし、髪も黒いのが多いし、人なつっこいしで、日本人とはウマが合いやすいんですね。実際、たちまち仲良くなって、一緒にずいぶんいろんな国をまわったものです。

一緒に仕事をしていると、彼らも、日本人って案外いやつだなあということが分かってくる。これは、どこの国に行っても同じです。

タイとかフィリピンとかインドネシアとかに日本企業がつくった工場では、管理的な立場にある日本人が、現地のワーカーと同じナッパ服を着て、同じ質素な弁当を食べている。ちっとも偉ぶったところがない。ホームパーティに招待されて行ってみると、奥さんがキリキリ舞いをしながら手料理をつくっている。こういう暮らしは、たいいてい国では中流階級程度の暮らしとされているんですね。しかし、それでいて、みんなが正直で清潔で、時間を守り約束を守る。できあがる製品は素晴らしい。

こういう日本人を目の当たりにすると、その国の上流階級の人々は、こんな人達でもこれだけのことができるのか。ならば、おれがやったらもっといい製品ができるはずだと思うんですね。そう思わせてきた日本人が、これまで、東南アジアの国々を奮い立たせてきているといってもいい。日本人はそのことにほとんど無自覚ですが、だからどの国にも、日本人を見習え、日本を追い抜けという本やテレビ番組があふれている。

日本が、これから先の国際社会で信頼され、尊敬され、仲良くやっていくヒントが、こういうところに隠されているんじゃないかと思うんです。そう考えると、私がイタリア政府から騎士の勲章を贈られたのも、私個人にしかじかの功労があったからということではなく、日本人とも仲良くやっていけそうだと、仲良くやっていこうよという、国際社会からのメッセージなのかもしれません。

内外の市民活動に関与。EU協会、世界なかよしクラブ（日露青年交流支援団体）、イタリア協会等を設立、主宰。在任中の6年間で留学生数は約200人から400人超に増加。

04年に新潟から千葉県船橋市に帰り、現在は新潟大学非常勤講師、帝京大学経済学部教授、千葉家庭裁判所調停委員、国際理解教育情報センター（NPO）会長、NPO「Thai-Do」理事長などをして活躍。05年11月イタリア政府から功勞勲章カヴァリエーレ章（騎士章）を受ける。趣味はフィギュアスケート、水泳、コーラス、イラスト。

ホームカミングデー開催のお知らせ

Welcome back to the place where your soul belongs

創立130周年の節目を機に、
一橋大学は今年からホームカミングデーの催しを実施することといたしました。

一橋大学はいま、法人化後の3年目を迎え、社会科学の総合大学として「アジアNo.1、世界Only oneへ」を標榜しています。そして、そのスローガンの下に「グローバルリーダーを輩出する教育拠点」「社会・経済の発展をリードする先端的研究拠点」「世界最高水準のプロフェッショナルスクール」「研究・教育ネットワークのグローバルハブ」という4つの姿を描きつつ、前進の努力を重ねております。大学の発展は、これまでも卒業生の皆様の温かい励ましとご指導に支えられてきました。いま、21世紀の冒頭における一橋大学のこの大きな挑戦を、如水会との一層緊密な連携のもと、新たに企画するホームカミングデーをきっかけとして、さらに力強く展開していきたいと思っております。

ホームカミングデーには、多くの卒業生の皆様に、若き日を過ごしたキャンパスに集い母校の現在の姿をご覧いただくとともに、恩師や旧友との再会をも果たしていただきたく、記念式典と記念講演をはじめとする多彩な行事と交流の場を用意いたしております。

卒業生の皆様にはなにかとご多忙の時期かと存じますが、同期、同クラス、同サークル、またご家族も含め、それぞれにお誘い合わせの上ぜひともお出掛け下さいますよう、心よりお願いを申し上げ、お待ちしております。

一橋大学長 杉山武彦

6/3

開催日：平成18年6月3日（土）

開催場所：国立西キャンパス

主なイベント

◆竹中平蔵総務大臣きたる

◆青春の思い出が宿る
附属図書館を大開放します

詳細は、大学ホームページ：

<http://www.hit-u.ac.jp/> をご参照下さい。



ご招待者

本来であれば、卒業生全員をご招待すべきところですが、会場の都合上、本年度のご招待者を以下の方々とさせていただきます。

- 昭和26年卒業（卒業後55周年目）
およびそれ以前卒業のOB・OGの方々。
- 昭和36年卒業（卒業後45周年目）、
昭和46年卒業（卒業後35周年目）、
昭和56年卒業（卒業後25周年目）
のOB・OGの方々。

『リスク—神々への反逆』

賭博師たちにより発見された、 リスクという概念

本書『リスク—神々への反逆』は、「リスクという概念の理解とコントロール」という視点から人類の歴史を捉えた本です。

リスクという概念はルネッサンス期の賭博師たちが初めて見出し、現代では科学技術や経済活動をはじめ生活の様々な場面において広範に用いられている便利な概念ですが、リスクを確率・統計の言葉を用いて表現する時、それが客観的事実を表しているようなケースから、主観の表明であるケース、はたまた両者の中間にあると思われるものまで、多種多様なケースが存在します。例えば「サイコロを1回投げる時、1の目が出る確率は6分の1である」という最も簡単だと思われる表現ですら、意味を突き詰めようとすると易しくはありません。なぜなら、「サイコロを何回も投げていれば、1の目が出る頻度が6分の1に近づく」と解釈しようとしても、サイコロを無限回投げて確認することは原理的に不可能ですし、仮に千回投げて頻度が6分の1に近かったとしても、そのまま投げ続けて6分の1に近いままか否かは何とも言えません。また、別の解釈として「サイコロにゆがみがなければ、どの目が出るのも同様に確からしいので6分の1」というのもありますが、「らしい」ということはこれは主観に基づいた解釈なのではないでしょうか？

このように、リスクに関する表現とナマの現実が接するところ必ずモヤモヤした分からない部分が出てきます。本書でも、序論で述べられているように、「ここで展開される物語は、全編にわたって、次の二つの対立する考え方を持つ人々の緊張関係で特徴づけられている。一方は、最善の意思決定は計量的手法と数字に裏付けられており、過去のパターンに依存してい



ると主張する人々である。他方は、その意思決定を、不確実な将来に関するより主観的な信念の程度に基づいて行う人々である。これは未だかつて決着を見ない論争でもある」という見方を軸にして、人類がリスクという概念をいかに発見し、時代とともにどのように理解を進めてきたかが述べられています。

数字発見の歴史から商学、 経済学の概念についても解説

内容について簡単に紹介しますと、はじめは賭博が有史以来人気を博してきたことについてや、また数字が無ければ確率という概念が生まれようもないのでまず数字の発見の歴史について、ゆっくりと解説が始まります。ルネッサンス期の賭博師たちがリスクという概念に初めて到達した話は第3章でようやく現れ、その後は第5章で統計学および保険の誕生、第6章で効用関数の発見、という具合に進んでいきます。

後半では、経済現象の分析において現れる様々な概念についても解説されています。例えば第12～13章はアロー、バシユリエ、ナイト、ケインズら先駆者の業績について、第14章はゲーム理論、第15章はポートフォリオ選択理論、第16～17章は行動ファイナンス、第18章はデリバティブ（金融派生証券）についての解説です。主観確率について

の「リスクに対する感じ方が人によって異なるということは実はよいことなのだ。もし、誰もが全てのリスクに対して全く同じような評価を下せば、多くのリスクを伴う好機というものは見送られることになる」という箇所や、リスクと時間との関係について「リスクと時間は同じコインの裏表でもある。明日がなければリスクも存在しないのだから」と述べている箇所など、なるほどと思わせる記述が随所に見られました。興味のある部分だけをさっと眺めるよりも、むしろ腰をすえてゆっくり読むのに適した本だと思います。お勧めしたい好著です。



『リスク—神々への反逆』

ピーター・L.バーンスタイン (Peter L. Bernstein) / 著 青山 護 / 訳
日本経済新聞社刊 定価：2,200円＋税 1998年8月24日発行

『アジアにおける近代的工業労働力の形成』

なぜ、人間は一生懸命働くのでしょうか？

たとえば、現実の組織活動をよく観察してみると、現場労働者の「一生懸命さ」が生産性の良し悪しを決めることが多いことがわかってきています。この例ひとつとっても、「人間がどういふ場面でどれだけ一生懸命働くのか」という問題は現実社会を考える上で決して無視できない間いではないことは明らかでしょう。他方、経済学は長い間、この疑問に対して「そうしないと食べていけないから（＝お金がほしいから）」という単純で常識的な答えを用意するだけでよしとしてきました。ところが、もし問答を聞いた人に会社・組織を運営した経験があれば、反射的に「そんな単純じゃない」とつぶやくかもしれません。そしてこのつぶやきは、多くの人の共感を呼ぶでしょう。

本書は、インドと中国という近年目覚ましい工業化を遂げている国で実施したさまざまなアンケート調査をもとに、この「人間がどういふ場面でどれだけ一生懸命働くのか」という問題に正面から切り込んだ労作です。とくに、「単に労働生産性や狭義の労務規律、あるいは学歴水準など外的に観察可能な側面だけでなく、労働者個人の価値観や意識、とりわけモチベーションに深く関連する職務意識や態度こそが、（工業労働力の質に対して）決定的に重要な意義を有する（p.9）」という前提で、これら諸点を実証的に分析しています（括弧内は評者）。とくに、経済発展の初期段階は、従来の社会関係とは無縁の工場組織や機械設備が流入するのが常ですので、労働者のモチベーションにギャップが生まれやすく、一般的な問題として考える上でも、アジアの開発政策を考える上でも、本書の題材はとて重要です。

分析から得られた結論は多岐にわたっているので、関心がある方は是非本書を紐解いていただくとして、誤解を恐れずに（評者の関心をもとに）列挙すると次のようになります。

●インドでは女子やムスリム、中国では改革が

遅れた企業の従業員などは、一般に質が劣った労働者と考えられているが、職務意識が特段に低いわけではない。

●インドでは、農村部出身の労働者は、出身地との紐帯を強く残しているために、一度就職してもすぐに離職してしまうなど、近代的労働力としては質が低いと考えられてきたが、データ上は観察できない。

●中国では、企業間というよりは管理者層と労働者層との間に職務意識の違いが観察される。また、全体的に、金銭報酬に対する選好が強い。

●職務意識をインドと中国とで比較すると、インドの方が集団主義的で、中国は個人主義的である傾向が観察される。



ステレオタイプのな議論に対し、一石を投じる

両国で比較可能なアンケート調査を詳細に設計し、しかも実証結果を慎重に解釈しているため、一見派手でわかりやすい結論にはなっていません。その分、信頼できる観察結果が得られており、これからの議論を触発する内容であると評価できます。この評価の高さは、本書が、第26回労働関係図書優秀賞（日本労働政策研究研修機構）、平成17年度日本学士院賞を受賞していることからわかります。

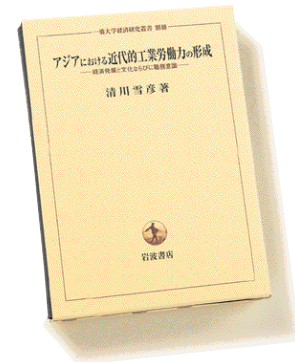
本書から導き出される議論をひとつあげれば、たとえば宗教倫理の問題があります。宗教倫理と経済との関係では、マックス・ヴェーバーのテーゼが有名で、キリスト教圏ではそれこそ山のように同種の研究があります。しかし、

アジア圏ではマイクロデータを用いた実証研究はそれほど多くありません。そのなかで、本書第5章ではムスリムとヒンドゥーを比較して、より「強い宗教」であるイスラム教であっても、（ヒンドゥーと比べて）職務意識には大きな違いをもたらしていないことが示されています。この結論を敷衍すると、たとえば商社などでイスラム圏に派遣された方から「このへんの労働者はムスリムだからぜんぜん働かなくて…」といった感想が聞かれるかもしれませんが、それは別の要因（たとえば会社の労務管理が合理的ではないから）でまじめに働かないのであって、ムスリムだから労働に対して勤勉ではないというわけではないことがわかります。このような

議論は、社会科学の実証研究がもっとも得意とするところでしょう。

本書には、このような興味深い議論が随所にちりばめられており、社会科学的思想を鍛えたり、インド・中国など開発途上国での問題を考えたりするのに、とてもよい題材を提供しています。

また、本書読後、伊藤秀史・小佐野広編著『インセンティブ設計の経済学』勁草書房（2003年）を読んでもよいかもしれません。こちらは現在経済学の成果を直接似たような問題に応用した解説本なので、比較すると本書著者の立場がより鮮明になると思います。



『アジアにおける近代的工業労働力の形成』
清川雪彦／著

岩波書店刊 定価：9,700円＋税 2003年2月27日発行

兼松講堂が、優良建築物を表賞する BELCA賞のベストリフォーム部門で入賞しました



皆様の記憶にも新しいと思いますが、如水会の全面支援を得て大改修工事を行った兼松講堂が、社団法人建築・設備維持保全推進協会（Building and Equipment Life Cycle Association）が主催するBELCA賞（優良建築物賞）を受賞しました。空調設備がなく、老朽化が進んだ講堂を、快適な施設として蘇らせたことが高く評価されました。



BELCAは、以下の宣言文ののっとり、「良好な建築ストックの形成」の推進を目的とする社団法人です。

1. 建築物は、社会資産であり、そのロングライフ化は後世に対する責務である。
2. 建築物のロングライフ化は、地球温暖化防止に加え産業廃棄物の排出を抑制するとともに、資源やエネルギーの有効活用を通して、地球に優しい、「持続可能な開発」のための必要条件である。
3. 建築物のロングライフ化は、美しい街並形成には不可欠である。
4. 建築物の寿命は100年程度を目標として企画・設計・施工・維持管理・診断・改修されなければならない。
5. 建築物のロングライフ化推進のために、建築ストックに関するあらゆる情報が整備されなければならない。
6. 建築物のロングライフ化推進のために、教育の重要性が認識されなければならない。
7. 建築物のロングライフ化推進のための総合的な誘導制度が整備されなければならない。
8. 建築物のロングライフ化推進のために、品質の評価、表示と保証のシステムが整備されなければならない。
9. 建築物のロングライフ化推進のために、これを支えるニュービジネスが近代的な業種として整備されなければならない。
10. 建築物のロングライフ化推進のために、関係団体等の連携が密にされなければならない。

（社団法人 建築・設備維持保全推進協会「宣言文」より転載）

研究・教育振興のために
ご寄附へのご理解、
ご協力をお願いいたします。

一橋大学基金

本学の研究・教育振興のための財源基礎整備に資するものです。
「教育振興資金」と「研究振興資金」で構成されています。

寄附金の使途について

寄附金については、寄附者のご意向に沿った目的により使用し、
一橋大学の発展のために有効に活用されます。
主な使途は以下のとおりです。

I. 教育振興資金

●学生支援

- 〔1〕 奨学支援／本学独自の奨学金制度の創設
- 〔2〕 課外活動助成／クラブ活動の活性化
- 〔3〕 海外留学支援／協定大学等への留学拡大
- 〔4〕 留学生支援／留学生の奨学金制度の整備

●キャンパス整備

- 〔1〕 施設整備／教育、研究環境の充実、体育施設の整備
- 〔2〕 アメニティの向上／緑化整備の促進

II. 研究振興資金

●研究支援

- 〔1〕 研究促進／本学における戦略的研究
- 〔2〕 出版助成／研究成果の公表、刊行物制作経費
- 〔3〕 研究環境の整備／情報ネットワークの整備

●国際交流

- 〔1〕 国際交流活動／国際シンポジウム等の開催、著名研究者の招聘
- 〔2〕 研究国際活動／教員、大学院生の海外派遣

●図書館資料整備

- 〔1〕 図書購入資金／研究・学習資料の充実

●社会連携

- 〔1〕 社会・地域への貢献／
社会・地域との連携強化、公開講座、講演会の開催
- 〔2〕 卒業生との連携／ホームカミングデーの実施

寄附金に対する税制上の優遇措置について

寄附者が個人の方の場合は、所得税法、
法人の場合は法人税法上の優遇措置が受けられます。

<http://www.hit-u.ac.jp/kifu/index.html>

〔お問い合わせ先〕一橋大学基金事務局
TEL：042-580-8888

一橋大学広報誌「HQ」

〈編集発行〉
一橋大学広報委員会

〈委員長〉
副学長（社会連携担当） 伊藤邦雄

〈編集委員〉
商学研究科助教授 松井 剛
経済学研究科教授 池 享
法学研究科助教授 山田 敦
社会学研究科教授 足羽與志子
言語社会研究科教授 坂井洋史
国際企業戦略研究科助教授 大上慎吾
経済研究所教授 安田 聖

〈編集協力〉
株式会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉
株式会社情報研究社

〈お問い合わせ先〉
一橋大学学長室企画広報係
〒186-8601 東京都国立市中2-1
Tel：042-580-8032 Fax：042-580-8016
<http://www.hit-u.ac.jp/>
koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。
一橋大学学長室企画広報係 koho@ad.hit-u.ac.jp
※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先
一橋大学学長室企画広報係
042-580-8032

編 集 室 か ら

今年もまた、サクラの季節が来ました。国立の大学通りを懐かしく思い出されるOB・OGの皆さんも多いことでしょう。大学通りのサクラは、老齡と排気ガスなどによる傷みがひどく、ここ何年か街の人々があれこれ保全策を講じています。たとえば、根元を踏みつけないように、木の下での花見は御法度となりました。

いちばん早く咲きはじめ、いちばんたくさん花をつけるのは、大学キャンパス内のサクラのようです。とくにキャンパスの隅のほう、講義棟から離れた場所、静かに咲いているサクラ。日当たり最高、空気はきれい、酔客に煩わされることもなし……。やっぱり大学というところは、サクラにとっても、居心地のいい場所なのですね。（山菜）